

---

# 女王キリエ

カイリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女王キリエ

### 【Zコード】

Z3391Z

### 【作者名】

カイリ

### 【あらすじ】

修道女として育てられた孤児キリエ。ある日キリエの元にジュビリーと名乗る黒衣の伯爵が現れる。彼は、キリエが崩御した国王の庶子であると告げ、王位を継承させるために王都へ連れてゆく。しかし、王宮に到着したキリエたちを、彼女の異母兄レノックスの軍勢が襲う。ジュビリーによってその場を脱したキリエは、教会へ帰ると言い出すが、彼は思わず告白をする。

「国王には嫡男がいたが死んだ。私が殺したのだ。おまえを女王にするために」

異母兄姉たちとの死闘。隣国の侵攻。異国の王太子との出会い。大陸の霸者との対峙。

キリエは、数奇な運命に翻弄されながらも、王位を目指す。

## 第1章「ロンティーヴム教会の修道女」 第1話

息を弾ませながら、少女は古い石段を上がつていった。

修道女特有の頭布（ウインブル）を被り、質素な黒いローブをたくしあげ、一段一段上がつてゆく。ようやく最上階まで上がると、そこには青い帳が降りかけた夏の夕空が広がつていた。見下ろすと広大な農地が広がり、仕事に勤しむ農夫たちの姿がちらほらと見受けられる。もつと遠くに目を移すと、ところどころ黒々とした森が広がっている。少女は、おもむろに鐘から伸びている紐を手に取ると力いっぱい引っ張る。殷々とした鐘の音が鳴り渡り、帰り支度をしていた農夫たちが作業の手を休め、祈りを捧げ始めた。少女も両手を胸で合わせ、一心に祈りの言葉を呟く。やがて顔を上げると、再び外を眺める。

彼女は、この鐘楼で鐘を鳴らすのが大好きだった。教会から出たことがない少女にとって、唯一広い世界を眺めることができるのが、この鐘楼だったのだ。もつとも、信仰の世界で生きることに喜びと誇りを持つ彼女にとって、外の世界は憧れを持つと同時に恐怖を感じる世界でもあった。

少女は まだ十三か十四ほどの年頃 、鐘楼の窓辺に手をついてわずかに身を乗り出した。大きなアーモンド型の瞳が興味深そうに農夫たちの動きを追う。彼らとは親交があった。農作物や生活必需品を教会に運んでくるのだ。彼らは朗らかで、自分の知らない世界の話をよくしてくれた。そして同時に、生活の苦しさや、今起つている戦争についての不安も漏らしていった。

神聖暦一四九三年六月。イングランド王国。

プレシアス大陸の西に位置する島国イングランドは今、大陸の王国ガリアの内戦に参戦していた。ガリア王リシャールに対し、嫡男である王太子ギヨームが反旗を翻したのだ。リシャール王は亡妻の兄であるイングランド王エドガーに救援を要請し、それに応じたエドガーは

庶子であるルール公レノックス・ハートを派遣した。

冷血公の異名を取るレノックスの数々の残虐行為はこの地にも伝えられていた。普段から暴力的なこの青年は無類の白兵戦好きであり、異国の戦争に喜び勇んで出陣していったといつ。この村からも数人の若者がガリアに向かつたが、それは名を上げるためではなく、出稼ぎも同然であった。

少女が田園を見渡していると、一頭の馬が畦道を教会に向かって駆けてくる。急を知らせる馬か、かなりの速さだ。やがて馬は教会の中へと入つていった。何があつたのだろう、少女が不安そうに見下ろしていると、

「キリエ！」

鐘楼の下から声が上がる。

「いつまで鐘楼にいるつもりですか？」

「はい！」

キリエは慌てて返事をすると口段を駆け下りる。そこには美しい修道女がひとり佇んでいた。

「食堂の手伝いをしておあげなさい」

「はい！」

キリエが元気の良い返事を返し、食堂へ向かおうとするが、先ほどの馬に乗つた若者が急ぎ足で司教の書斎がある建物へ向かう姿があつた。

「ロレイン様……。何かあつたのでしょうか

キリエの問いかけに、ロレインが顔をしかめる。

「……悪い報せでなければ良いのですが……」

ここはアングル王国グローリア伯領のロンティニウム村。村に入つてくる情報はまず、この教会に伝えられる。アングルがガリアの内戦に参加することが決まつた時もここに伝えられ、村の若者たちが次々と戦争へ出かけていったのだ。キリエはその時のことによく覚えていた。

キリエは孤児だった。教会付きの司教ボルダーの話では、十四年

前にこの村の近くで拾われ、ここロンティニウム教会に託されとう。以来教会から出ることなく、修道女として暮らしている。戦争が長引けば自分のような孤児が増えるだろう。キリエは胸を痛めていた。

教会に持ち込まれた情報が明かされたのは、食事の準備が整つた頃だった。

「皆、食事の前に話しておかねばならぬことがある」

陰鬱な表情のボルダー司教が低い声で語り始めた。キリエを初めとする修道女や修道士たちは、黙つて司教の言葉に耳を傾けた。

「つい先ほど、王都イングレスから早馬が着いた。……国王陛下、エドガー・オブ・アングル様が、身罷られたそうだ」

その場にいた人々から驚きの声が上がる。エドガー王といえばまだ五四歳だ。

「昨年あたりからお体の調子が思わしくないとは耳にしていたが……まさかあの御歳で身罷られるとは……」

キリエは眉をひそめ、顔を伏せると手を合わせて祈りの文句を呟く。ひとしきり祈りを捧げ、顔を上げると険しい表情をしたロレンの姿が見えた。

国王エドガー・オブ・アングルはあまり人徳に優れていたとは言えない人物であった。数多くの愛妾を囮い込み、王妃であるベル・フォン・ユヴェーレンとは諍いが絶えなかつた。誇り高い大陸の大公ユヴェーレンの王女であるベルにとっては、愛人に現を抜かす夫に我慢がならず、王宮フレセア宮殿では陰湿な陰謀が常にはびこつていたという。

だが、そんな愚王にも長所はあつた。教会や修道院、施薬院などには少なからず援助を行つており、貧困層にはそれなりの人気があつた。地方の小さな教会に過ぎないこのロンティニウム教会にも、毎年かなりの援助金が下りている。

横柄だが陽気なこの王は、よく王都イングレス市内に出かけては薄汚い居酒屋に現れ、人々を驚かせていた。そして、その豪快さと

は裏腹に外交に関してはしたたかな面を併せ持ち、大陸の列強に対してうまく渡り合つ技量を兼ね備えていた。現在の戦乱の世において、小さな島国に過ぎないアングルが独立を保つことができるのも、一にかかるてエドガーの手腕の成果であった。

「どなたが王位を継承されるのかはまだ決まっていない」ということだが……、今は亡きエドガー王陛下のご冥福を皆で祈り、「王位……」。

キリエはほんやりと考えた。あの悪名高い冷血公レノックスはエドガーの庶子だ。まさか、この男が王位に就くなんてことは……。いつもも増して重々しい雰囲気の中で食事が済むと、キリエはいつものように図書室へと向かつた。この時間に聖典を読み、自習するというのが毎日の日課だ。

「キリエ」

図書室へ向かうキリエにロレインが声をかける。

「今日はもう遅いから休みなさい」

「え、でも……」

「今日のあなたは……、少し疲れているように見えます。明日に疲れを残さぬよう、休みなさい」

キリエはきよとんとした表情でロレインを見上げた。自分では特に疲れを感じてはいない。だが、日頃から細やかな気配りができるロレインだ。自分の疲労を感じ取つたのだろうか。

「では、お先に休ませていただきます。おやすみなさい、ロレイン様」

「おやすみ、キリエ」

深々と頭を下げ、自室へ向かつキリエをロレインが黙つて見送る。

「……ロレイン」

不意に声をかけられ、ロレインがぎくじと振り返る。

「……司教様」

廊下の角から、暗い表情のボルダーがぎくじと歩み寄る。

「……ついに、この日が来たな」

「……はい」

ロレインが苦しそうな表情で咳く。

「ほんにも早く、この口がやつてくるとは思ひも寄りませんでした……」

ボルダーも溜め息をつきながら頷く。

「……明日にも迎えが来るだろつ」

「準備をしておきます」

「頼む」

ロレインは一礼すると、踵を返した。

翌朝、薪を納めにきた農夫がキリエに愚痴をこぼしていた。

「聞いたかい、王様が亡くなつた話」

「ええ、昨夜」

農夫は手際よく薪の束を運びながら顔をしかめる。

「まだ五四だとよ。しかも、お世継ぎを決めずに亡くなつちまつたんだから、一体これからどうなるんだか。イングレスじゃあ、商人どもが右往左往しているらしいぜ」

「何故？」

不思議そうな表情で聞き返すキリエ。

「そりゃあ、王様に金を貸していた商人たちが少なからずいたってことさ」

「お金のことよりも戦争の方が心配だわ。ガリアの内戦から手を引いて下さるのでしようか」

「どうかなあ」

農夫が頭を搔き進む。

「ルール公はすぐに帰つてくるだろうな。そうなりや村の若い者も帰つてこられるが、あの冷血公は帰つてこなくてもいいんだがなあ。いつそのこと、ずっとガリアに残つてくれりやあな」

「リシャール王は残つて欲しいだろうな」

馬の世話をしていた修道士が口を挟む。

「そりや、内戦がまだ続いているんだからなあ。アングルの他に援軍を頼める国はないし」

「レオン公国は？」

キリエの言葉に、農夫と修道士が目を丸くする。

「だつて、確かにシャール王の弟君のお妃は、レオン公国の姫君ではなかつたのですか？　レオン公国からの援軍は望めないのでしょうか」

「驚いたなあ、キリエ」

農夫が陽気に笑い声を上げる。

「そんなこと誰に教えてもらつたんだい」

「ロレイン様に色々教えていただいたもの」

キリエが誇らしげに答える。

「他の教会区に移ることがあつても、恥ずかしくないよ」  
「ちゃんと勉強しているんですから」

「なるほどな」

そう返事を返すものの、農夫は腑に落ちない表情で幼い修道女を見下ろした。他の教会区に移るどころか、キリエは普段教会の敷地内から出ることを禁じられている。教会を出るのは、秋の収穫祭の時だけ。他の修道士や修道女は積極的に村で奉仕活動をしているというのに、どうこつわけかボルダー司教はこの少女を教会から出したがらなかつた。

「しかしながら、レオンはガリアの応援には行けないよ。ほら、レオンはエスタードの属国だろう？　エスタードのガルシア王はガリアが大嫌いだからな。宗主であるガルシア王の機嫌を損ねるようなことはしたくないんだろうよ」

「そうそう。ギヨーム王太子が、ガルシア王の娘との縁談を断つたからな」

「そんなことが？」

「それでリシャール王が怒つてギヨーム王太子をなじつて……、で、内戦になつたんだろう？　迷惑な親子喧嘩さ」

親子喧嘩。親の顔も名前も知らないキリエにとっては、血の繋がつた親子が国を二分する戦争を引き起こすなど、とても理解できなかつた。父親に反逆したギヨーム王太子とは、どんな少年なのだろう。

「それで、問題はこのアングルの次の王様さ……。ルール公だけは勘弁してもらいたいもんだ」

農夫や修道士が国の未来をああでもないこうでもないと言い合っているのを、キリエは黙つて聞いていた。だが、教会から出たことがない彼女にとつては、どこか遠くの出来事を聞いているようだった。

現在、プレシアス大陸ではこのガリア内戦が最も大きな戦禍を引き起こしているが、戦争が起こっているのはこのガリアだけではない。キリエたちが信奉するヴァイス・クロイツ教の聖都クロイツはコヴェーレン王国の自治都市だったが、分離独立を宣言。その独立を許さないコヴェーレンとの間では五十年越しの戦争が続いている。さらに、コヴェーレンは隣国カンパニーユラ王国にも王位継承に横槍を入れ、戦争状態に突入して十年になる。

大陸にはその他、ポルトゥス王国やナッサウ王国、ガリアの属国バー・ガンディ公国など、小さな国々が寄り集まっている。ここ五十年の間では戦乱が絶えず、長らく平和な時代が訪れていないが、こゝへきて大陸の覇権を得ようと台頭してきたのが、大国エスタード王国のガルシア王だつた。彼の父、先王カルロスがその土台を築き、息子ガルシアはそれを基盤に一挙に領土を拡大した実績があつた。彼はプレシアス大陸の統一を目指み、ヴァイス・クロイツ教最高指導者ムンディ大主教と対立している。

「ああ、そうだ」

不意に、農夫が明るい声でキリエに呼びかける。

「悪いけどキリエ、おまえさんの薬草をまた分けてくれないかな。代わりに、うちで作ったチーズをいくらか持つてきたんだが」  
キリエの顔が明るくなつた。

「まあ、ありがとうございます！　どの薬草を持つていかれます？」「

その頃、教会の門に馬車の一団が到着していた。派手さはないが、明らかに高位の者が使う馬車の到着に、門番たちは困惑して立ち尽くしていた。馬車から一人の青年が降り立つと、恐々と歩み寄つてくる門番に名を名乗る。

「私はジョン・トウリー子爵。ボルダー司教に目通り願いたい。クレド伯爵ジュビリー・バートランド様がおいでになつたと言えば、わかるはずだ」

「クレド伯……？　しょ、少々お待ちを……！」

この村はグローリア伯領に属しているが、クレド伯領といえば隣の領地だ。何故このグローリア伯領に、しかもこんな小さな教会に？　門番たちは不思議に思いながらも慌てて司教に知らせに走つた。

「……静かな村ですね」

ジョン・トウリーは、周りを見渡すと呟いた。後ろからもう一人の男が馬車を降りて歩み寄つてくる。

「……そうだな」

男は三十代半ばほどで、黒髪黒瞳。身にまとっているのも黒い胴衣で、全身黒尽くめに近い。綺麗に整えられた口髭と鬚。思慮深そうな額。鋭い目。どこか近寄りがたい空気を醸し出している。それに対し、ジョン・トウリーは明るい栗毛に薫色の瞳。見るからに実直そうな好青年だ。

「クレド伯……！」

二人の背後から、ボルダー司教の緊張した声が投げかけられる。

「「」、こんな所でお待たせして……、申し訳ございません！」

「構わん。教会がみだりに外部の者を入れない」とぐらい知つている「

冷たく言い放つジュビリー・バートランドに向かつて、ボルダーは改めて深々と頭を下げる。少し遅れてロレンインがやってくる。険しい表情の修道女は、ジュビリーを凝視すると黙つて一礼した。

「お早いお着きでしたな……」

ボルダーがジュビリーを中へ案内する。

「明け方にすぐ発つた」

「お疲れでござこましょ。少し休まれては……」

「時間がない」

「はつ」

一言一言が鋭い棘のように言い放たれ、ボルダーは強張った顔のまま、教会の庭に面した渡り廊下を進んでいく。その時、庭の奥で歓声が上がった。

「キリエ、相変わらずおまえさんの薬草園はすごいな!」

「そんなことないわ。もう少し種類を増やしたいのだけど。どれをお持ちしましょうか」

「ええと、カモミールとサンザシあるかい」

「乾燥させたのがまだたくさんあります。今、持ってきますね」

その様子をジュビリーが黙つて眺める。ボルダーはおずおずと声をかけた。

「……あの娘です」

「そのようだな」

じつとキリエを見つめるジュビリー。その目が静かに眇められる。幼い修道女は自分が育てた薬草たちを誇らしげに眺め、明るい笑顔で農夫と談笑している。小柄だが、花のように咲くその笑顔にその場が自然と明るくなるようだつた。ボルダーが耳打ちすると、ロレンが前に進み出て声高に呼びかける。

「キリエ!」

「はい!」

「あなたにお客様がいらっしゃっています」

「お、お客様、ですか?」

キリエは困惑の表情を浮かべた。孤児のキリエに訪れる者などいない。畠を出ると渡り廊下までやつてくるが、その顔は不安に満ちている。

キリエは、司教の後ろに佇んでいるジュビリーとジョンに視線を投げかけた。ジョンはにっこりと顔をほころばせたが、ジュビリーは冷たい瞳のまま無言で見つめてくる。眉間に皺を寄せた険しい表情の男を、キリエはじっと見上げた。誰だろう。キリエの不安はますます膨れ上がった。ロレインはキリエの服装にちらりと視線を走らせた。

「服を着替えましょう。着替えてから司教様のお部屋へ」「は、はい」

ロレインはキリエの肩に手を添えると、その場から連れ出した。

「ロレイン様……、あのお方は、どなたですか?」

「……お会いになればわかります」

言葉少なげに答えるロレイン。一体これから何が起こるのか。キリエは突然のことに戸惑いながら自室へ戻る。替えのローブを取り出すが、ロレインがそれを遮る。

「それではなく、こちらに着替えなさい」

「え、でも、それは……」

ロレインが取り出したのは祭礼用の白い衣装だった。これは、教会に高貴な人物が訪れた時にも着用することがあった。

「粗相があつてはなりません」

「は、はい」

祭礼用の衣装を着るということは、あの男性は相当な身分なのだろうか。キリエは黙りこくつて着替えを済ませた。

司教の部屋まで来ると、ロレインが扉を静かに叩く。

「お待たせいたしました」

「入りなさい」

ボルダーのしわがれた声が返つてくる。キリエは緊張で喉の渴きを感じながら、恐る恐る部屋へと踏み入った。

部屋の中央にボルダーとジョン。ジュビリーは奥の窓から教会の庭を見下ろしていた。そして、ゆっくりと振り返る。

「…………」

ジュビリーの鋭い目にキリエは思わず息を呑んだ。一ハ五センチはあるだろうか。小柄なキリエは巨人でも見上げるような表情で彼の顔つきを窺つた。

「キリエ、こちらはクレド伯爵ジュビリー・バートランド様。そして、ジョン・トウリー子爵。……ご挨拶して」

言われるままにキリエは胸の辺りで両手を合わせ、軽く片膝を付いて最敬礼した。

「キリエと申します。天なる神に、お恵みと今日の出会いに感謝いたします……」

そう言って立ち上がろうとした時、キリエは思わず「あやつ」と悲鳴を上げた。彼女の右手をジュビリーが手に取ると、その場に跪いたのだ。思わず引っ込めようとした指先をジュビリーが握り締める。

「……！」

ジュビリーは上田遣いにキリエを見つめ、ゆっくりと挨拶を述べた。

「……お迎えに上がりました。レディ・キリエ・アッサー」「はっ……？」

手を握られたまま、キリエが戸惑いながら聞き返す。ジュビリーは目を眇め、怯えた表情の修道女を探るように見つめた。やがてすつと立ち上がると、静かに口を開く。

「今から言うことを良く聞くのだ」

「は、はい」

「私とそなたは遠縁に当たる」

「え……」

キリエは眉をひそめた。

「そなたの母はレディ・ケイナ・アッサー。グローリア伯爵ベネディクトの令嬢だ」

「え……、ま、待つて下さ……」

キリエが慌てて口を挟む。

「お人違いですっ。私は孤児で、ファミリー・ネームがありません。

洗礼名だって、司教様がお付けになつたもので、私……」

「ベネディクトが、身分を隠して育てるよう言い含めてここへ預けたのだ。そなが一歳の時、母であるレディ・ケイナが病死したためだ」

冷たく乾いた声で淀みなく言い放つジュビリーに、キリエは思わず顔を引きつらせて後ずさる。何……？　このお方は……、何故こんなことを言うの……？

「身分を隠す必要があつたのだ。そなたの父親は……、昨日身籠られた国王陛下、エドガー・オブ・イングル様だ」

「……は……？」

キリエの両目が大きく見開かれ、思わず背後のロレインを振り返る。が、ロレインは苦しげに目を閉じ、俯いている。

「もちろん、陛下には王妃がいらっしゃる。だから、そなたは庶子ということになる。だが、陛下には嫡子がいらっしゃらない。つまり、そなたはイングル王国の王位継承権を有しているのだ。そなたには、イングレスのフレセア宮殿で王位を宣言する権利が」「やめてッ！」

「……」

キリエが思わず上げた叫び声にジュビリーは口を開いたが、その表情は微塵も変わらない。

「ひ、ひどいわ……」

キリエはかすれた声で呟き、顔を横に振る。

「私が、世間を知らない修道女だと思つて……、そんな、で、でたらめを……。陛下に対する、冒涜ですッ！」

「キリエ」

ボルダー司教がなだめるように声をかける。ジュビリーはじっと

幼い修道女を見下ろし、口を開いた。

「……時間がないのだ、キリエ」

「……」

「今から、この国は大きく揺れ動く。そなたを含めて王位継承権保持者は五人。一人はすでに継承権を放棄しているが、エドガー王は後継者を指名せずに崩御された。王位継承までに国が乱れば、近隣諸国に付け入る隙を与えることになる」

「で、でも、証拠が……」

「証拠?」

キリエはぐくりと唾を飲み込むと、必死に訴えた。

「私が、国王陛下の娘である証拠なんて、何も、ないじゃないですか……。私みたいな修道女に王位継承権なんか、皆が認めるわけがないません!」

「蝶の紋章だ」

キリエの言葉を遮るように、ジュビリーが言い放つ。その瞬間、キリエは言葉を飲み込み、黙り込んだ。そして、見る見るうちに顔から血の気が引いてゆく。

「蝶の紋章をあしらつた指輪を持っているはずだ。蝶はアッサー家の紋章。本来アッサー家の紋章は青い蝶だが、そなたが持っているのは赤い蝶のはず。国王はそなたの誕生を祝い、王家の紋章である赤獅子にちなんで、赤い宝石で蝶をかたどつた指輪を作らせた」

「あ、ありません、そんなの……。持つていません!」

明らかにうろたえた表情のキリエが叫ぶ。ジュビリーは辛抱強くキリエを見つめていたが、やがて、傍らに控えているボルダーを見る。

「……ボルダー」

「……」

ボルダーは眉間に皺を寄せ、沈黙していたが、やがて諦めたように天井を仰ぎ見た。

「……ネックレスにして……、首から下げております」

それを聞くとジュビリーが大股に歩み寄り、キリエは恐怖に顔を引きつらせて後ずさつた。

「いや……、来ないで……！」

すると、背後からロレインがキリエの腕を掴む。

「キリエ……」

「ロレイン様……！ 放して……！ お願ひ……！」

泣きながら懇願するキリエを、ロレインは口を引き結び、目を閉じて必死で抱きすくめた。ロレインにももうどうすることもできない。キリエは絶望して再びジユビリーを見上げた。

「もう一度言つたれ。時間がないのだ」

「…………」

「放棄した一人を除いて、他の者は皆、王位にふさわしい人間ではない。アングルの未来を、闇に閉ざすわけにはいかないのだ」

「で、でも……」

「それからもうひとつ。おまえの祖父、ベネディクトはもう長くな

い

「……」

キリエが体をびくつと震わせる。

「十一年間、おまえに会いたくても会えなかつた。……おまえに会いたがつていてる。今会わねば、後悔するのはおまえだ」

「…………」

キリエはうな垂れると深呼吸を繰り返した。頭ががんがんと割れるように痛い。耳鳴りが響き、気が遠くなりそうだ。しばらく俯いていたキリエだったが、やがてゆつくり顔を上げると、そつと右手を首元に這わせた。指先が鎖を探ると手繰り寄せた。キリエの小さな手に大振りな指輪が現れる。金の台座にルビーの蝶が輝く。ジユビリーの背後に控えたジョン・トウリーが思わず息を呑む。

「……心配するな」

ジユビリーが低く囁いた。

「おまえの身は、私が守る」

そう言つと、右手を差し出す。キリエはその手をしばらく見つめ、やがて恐る恐る手を取る。部屋を連れ出されようとするキリエに、背後からロレインが名を叫ぶ。

「キリエー！」

振り返ると、ロレインが小走りに駆け寄り、キリエを抱きしめた。

「Eの日が来なければと、ずっと祈っていました……！」

「ロレイン様……」

では、ロレインは知っていたのか。自分が王の血を引く娘であることを。だが、そんなことはもうどうでもよかつた。

「いいですね。良き女王におなりなさい」

女王。その言葉に、キリエはぞくじとした。

「……良いか」

ジュビリーの声に、二人は体を離した。

「……お行きなさい」

ロレインが囁く。キリエは頷くと、ゆっくりジュビリーを振り返つた。再びジュビリーはキリエの手を引くと、部屋を出ていった。

「……キリエ……！」

ロレインは顔を覆うとその場に蹲つた。その後ろで、相変わらず暗い表情をしたボルダーが無言で立ち尽くしていた。

三人は馬車に乗り込むと、一路グローリアの城に向かつた。キリエは緊張に顔を強張らせたまま、黙りこくつて馬車に揺られている。窓からそつと外を見上げると、住み慣れた教会がどんどん遠ざかってゆく。

しかし、今思えば確かに自分は教会で奇妙な扱い方をされていた。村の中央に位置する教会にいながら、キリエは教会を出て村を訪れることが許されていなかつた。年に一度、秋の収穫祭に参加することを許されていただけだ。他の修道士や修道女は、積極的に村に出て奉仕活動をしていたというのに……。それが許されていなかつたのは、自分がまだ幼い故だと信じきっていたのだ。それが今、自らの出自を聞かされ、強引に教会から連れ出され、まったく見知らぬ土地へと連れて行かれようとしている。キリエは、孤独と不安で押し潰されそうになつた。

「……キリエ様」

キリエの緊張を解こうと、ジョンが優しく声をかける。

「その……、指輪はずつとそうやつてネックレスに?..」

問われてキリエはおずおずと顔を上げる。

「……司教様が……、私を拾つた方がくれたものだと仰つて……。大事に持つていなさいと……」

「なるほど」

「……まさか、そんな指輪だつたなんて……」

泣き出しそうな声でキリエがそう呟き、ジョンは氣の毒そうに眉をひそめる。  
「大丈夫ですよ。その指輪はこれからあなたの立場を守つて下さるものです」

キリエは、ジョンの隣に視線を向けた。黒衣の伯爵は小さな窓から流れゆく風景を見つめている。その表情は相変わらず冷たい。  
「グローリア城までもう少し時間がかかります。どうぞ楽になさつてください。……ベネディクト様も心待ちにしておられます」

つい先ほど初めて聞いた祖父の名前。今まで天涯孤独だと思つていたキリエは激しく心が乱れていた。ケイナ・アッサー。ベネディクト・アッサー。そして、ジュビリー・バートランド。母親だ、祖父だ、遠縁だと言われても、あまりにも突然のこと理解できない。自分は、一体何者なのだ?

キリエはそつと窓から外を眺めた。木々の間から、遠くに家々がぼんやりと見える。やがてそれらの数が目立つてくる。教会を出て一時間ほど経つただろうか。やがて道は幅が広くなり、辺りの雰囲気が変わつたことに気づいた。

「着いたぞ」

今まで沈黙していたジュビリーが短く言い放つ。キリエが少し身を乗り出すと、石造りの城が立ちはだかっているのが見える。灰色の堅牢そうな石壁。主塔には青い蝶が描かれた紋章旗がはためいている。

しばらく馬を走らせるが、やがて馬車は城門をくぐり、中庭へと入つてゆく。中庭には兵士と思しき男たちや従者たちが大勢忙しく走り回つてゐる。そして、馬車に氣づいた者たちが馬車から顔を覗かせてくる少女を見つけ、口々に何かを言い合つてゐる。ジュビリーはそれに氣づくとすぐに窓のカーテンを引いた。キリエは、今までに見たこともない人の多さに再び恐怖心が頭をもたげてきた。

騒がしい中庭を抜けると、ようやく馬車は停まつた。ジョンが手を添えて降ろすと、キリエは恐々と辺りを見渡した。ロンティニーム教会など比べ物にならないほど巨大な城が目の前に屹立している。それだけでも、キリエの恐怖心は頂点に達した。

やがて、塔の門からたつぱりとしたローブをまとつた男が、数人の騎士を従えてやってくる。

「ありがとうございます、クレド伯」

ローブの男が一礼する。五十代半ばほどに見えるこの男は、キリエに視線を移すと恭しく跪き、彼女の右手を取る。

「レディ・キリエ。ご無事のご帰還、何よりでございます。グローリア城代家令フランシス・レスター男爵にございます」

レスターはしつかりした体格で、灰色の髪。奥まつた目から探るようにキリエを見つめてくる。そして、少し感慨にふけるような口調で呟く。

「……大きゅうなられましたな」

「…………」

わずかに首を傾げるキリエに、横からジュビリーが声をかける。

「レスターは、おまえの祖父の腹心だ」

「…………おじい様の…………」

「幼い頃のレディ・ケイナにそつくりでござります。ご立派になりましたな」

レスターの口ぶりでは、幼い頃の母を知つてゐるらしい。キリエは目の前で跪く老臣をじっと見つめた。

「ベネディクトは」

ジュビリーが低い声で尋ねると、レスターは顔をしかめた。

「……今夜が山ではないかと」

それを耳にしたキリエは怯えた表情でジョンを振り返る。

「慌てないで、キリエ様。」

ジョンがキリエの手を引き、中へ進む。

城の中にはひんやりとしており、静まり返っていた。まだ暁過ぎだところに薄暗く、陰鬱な空氣に満ち満ちている。時折侍女たちが黙つて急ぎ足で通り過ぎる。鮮やかな赤い絨毯が広い通路に敷き詰められ、暗い塔の中でもんやりと浮かび上がる。

壁には甲冑や武器、防具が整然と並べられ、時折城主の家族らしき肖像画が掛けられている。キリエはそれらを見上げながら、歩みを進めていった。

「……義兄上あいにしあ」

ジョンが前をゆくジュビリーにそう呼びかけ、キリエは少なからず驚いた。ファミリー・ネームが違うが、兄と呼ぶということは……？

「クレドの軍に準備をさせましょうか」

「そうだな」

ジュビリーが咳く。

「明日の朝にはここへ到着させろ」

「はっ」

ジョンが振り返ると、レスターが頷いて踵を返す。その様子を田で追つていたキリエが、立ち止まつたジュビリーにぶつかりそうになつて慌てて前に向き直る。

「兄上」

通路の先から若い女性の声が聞こえる。キリエがジュビリーの背から覗き見ると、貴族の令嬢と思しき女性がこちらへ小走りにやってくる。美しい黒髪を綺麗に結い上げ、凜とした端正な顔つきをしている。

「マリー・レン。来ていたのか」

「じゅらから使いが参りまして……」

「……悪いのか」

ジユビリーの問いにマリーエレンは固い表情で頷く。そして、キリエに気づくと顔の表情を和らげた。

「レディ・キリエ・アッサーでござりますね？」

「あ……、あの」

マリーエレンは跪いてキリエの右手に口を付けると微笑んだ。穏やかな顔つきの女性が現れただけで、キリエの気分はずいぶんと落ち着いた。

「マリーエレン・バートランドと申します。ジユビリーの妹にございます」

そして、懐かしそうに囁く。

「……そつくりですわ、ケイナ様に」

彼女も母を知っている。キリエは思わずじっとマリーエレンを見つめた。

「お疲れでしょうが、このままベネディクト様のお部屋へ……」「は、はい」

一行は再び城内を行き、やがて塔の最奥部へと到着した。

「…………」

部屋から医者らしい老人が出てくると、黙つて一行を中へ招き入れる。部屋の奥には天蓋付きの寝台が置かれ、そこに数人の従者が佇んでいる。昼の陽光を遮る厚いカーテンから光が一筋部屋に伸びている。寝台には、六十代後半と思しき老人が横たわっていた。従者たちはキリエたちに気がつくと黙つて寝台から離れた。

「キリエ様」

マリーエレンがそつと咳き、キリエの手を握った。キリエはマリーエレンの手をぎゅっと握り返し、そつと寝台へと近づいた。

老人はかすかに喘ぎながら呼吸を繰り返していた。灰色の髪が汗で額に張り付き、刻み込まれた深い皺が痛々しい。痩せた顔を取り巻く髪は伸び放題に伸び、細い首に無力に垂れている。

「……ベネディクト様」

「マリー・Hレンが耳元で囁く。

「キリエ様で、じこますよ。ずっとお会いになりたがっていた……、

キリエ様です」

「…………」「

ベネディクトはつすら目を開けた。マリー・Hレンがキリエの顔を見上げ、キリエはおずおずと顔を祖父に近づけた。

「…………おじい様…………」「

その小さな声で、ベネディクトの瞳が輝く。何度も瞬きをするとゆつくり顔を巡らせ、キリエを見つめる。

「…………ケイナ」「

ベネディクトの乾いた口から出た言葉は、孫ではなく娘の名前だつた。

「…………ケイナ…………。わしのケイナ…………！」

「ベネディクト様…………！　ケイナ様ではござりこません。お孫様の、キリエ様ですよ！」

マリー・Hレンの呼びかけでベネディクトは顔をしかめ、まじまじとキリエを凝視する。すると、ジュビリーがキリエの背後までやってくると囁いた。

「…………ベネディクト。あなたが十一年前、ロンディニウム教会に預けたキリエだ。あなたに会いに来たのだぞ」

「…………キリエ…………、キリエ、おまえなのか…………？」

「おじい様」

キリエは思わずベネディクトの手を両手で握った。やせ細った手は、見た目からは信じられない力で握り返してきた。そして、ベネディクトの手から大粒の涙が溢れ出る。

「キリエ…………！　お…………、大きくなつたな…………！　会いたかつたぞ…………！　許してくれ…………！　おまえには…………、何もしてやれなんだ……。許してくれ…………！」

キリエは顔を振ると、ベネディクトの首に腕を回すと抱きしめた。初めて会う祖父。これが血の絆なのだろうか。こみ上げてくる懐か

しさで胸が一杯になる。そして、ひたすら許しを請う祖父が哀れでならなかつた。

「キリエ……。ケイナは、おまえの母親は、おまえを心から愛していた……。おまえが争いに巻き込まれぬよう」と、教会へ預けるようわしに言い遣して死んでいった……。わしは……、でき得る限りおまえを守ろうとした。だが……、それも限界だ」

「…………」  
限界。その言葉を耳にしてキリエは顔を上げた。ベネディクトは力のこもった瞳でキリエを見つめた。

「おまえは……、わしの後を継ぐのだ。今からおまえは、このグローリアの領主、グローリア女伯爵だ。……これから先のことは、バートランドと……、レスターに任せである」

「…………伯爵様」

「そうだ。彼らは何があつてもおまえを守る。わしも……、天からおまえを見守る」

「おじい様！」

ベネディクトの表情が歪む。ぜいぜいと喉を鳴らし、震える声で囁く。

「…………おまえには……、これから過酷な運命が待つている……。だが、決して……、くじけてはならん……！　おまえのためにも……、アングルのためにも……！」

アングルのために。その言葉がキリエの胸に突き刺さる。やがてベネディクトは呻き声を上げて咳を繰り返し、従者たちが慌てて周りを取り囮む。

「もうこれ以上は……」

医者も厳しい顔でジュビリーを見上げる。ジュビリーは額べとりエレンに目配せする。

「キリエ様、おじい様を休ませてあげましょ。いらっしゃりく……」「ま、待つて……。まだ聞きたいことが……」

マリー・エレンが医者を振り返るが、医者は険しい顔つきで頭を振

る。マリー＝レンは辛うじてキリエの手を引く。

「待つて！　おじい様！」

従者たちが数人がかりでキリエを部屋から連れ出す。

「…………」

喘ぐベネディクトを、ジュビリーが見下ろす。息を整えたベネディクトは顔を歪め、ジュビリーを見つめる。

「…………これで、良いのだな……？　本当に、これで……？」

ジュビリーは黙つてベッドの端に跪き、ベネディクトの顔に耳を近づける。

「これで……、おまえの思に通りになつた……。だが、忘れるな……！」

「…………キリエは…………キリエは…………！」

「わかつてゐる」

「キリエは、私の命がある限り守り続ける。…………約束する」

ベネディクトは苦しげな表情でジュビリーを凝視するが、やがて頭を再び枕に沈めた。

「マリー＝レン様、おじい様は…………」

廊下を進みながら、キリエが不安そうに訴える。すると、マリー＝レンが真顔で振り返る。

「いけません、キリエ様。あなたはこれから女王になられるお方。私などを敬称で呼んではなりません」

キリエは泣き出しそうな顔つきで立ち去った。

「ほ、本当に……、私が女王になれると…………？　本当に、そう思つているのですか？　おかしいわ……。皆どうかしてゐわ……！」

「キリエ様…………」

マリー＝レンは困つたよつてつゝ溜め息をつくと膝を曲げ、視線を合わせる。

「…………無理もあつませんわ…………。十一年もの間、何も知らずに教会で過ごしていくらしやつたのだも…………。でも、アングルは今、あ

なたを必要としているのですよ。アングルの未来は、あなたにかかります」

「そんなの、知りません……！ 教会に帰らせて……！」

マリー・ヘレンがどうしたものかと困惑していると、背後からジョンが呼びかけてくる。

「マリー様

「ジョン……」

困りきった表情のマリー・エレンと、涙ぐんで顔を強張らせているキリエの顔を交互に見やると、ジョンも眉をひそめて溜息をつく。「キリエ様……」

「お、おじい様は心配だけビ、でも、私、女王になんかなりません

……」

ジョンも腰を屈めるとどこか必死な表情でキリエに言い含める。「まだキリエ様にはお話ししていないことがたくさんあります。あなたにじつ納得いただけるよう、今から義兄上が説明してくれます。ですから……」

あの冷たい表情をした伯爵から何の話があるというのか。キリエは目に涙を溜めたまま俯いた。そこで、マリー・ヘレンがそつとジョンに囁く。

「ジョン、あなたもクレドへ帰るの？」

「ええ、マリー様も、一緒にクレドへお帰りになること、義兄上が仰せです。クレドで軍を整え、明日王都へ向かいます。マリー様にはクレド城をお頼みします」

「軍？」

キリエが不安そうに問いかけると、ジョンは笑って答える。

「ご安心ください。イングレスへ攻め込むわけではありませんよ」「では、ここにも城の守りを……」

「そうですね」

一人のやりとりを聞き、キリエは不思議そうな顔で問いかけた。

「……マリー・ヘレン様は……、ジョン様の奥様なのですか？」

「えッ？」

途端に一人がびっくりして振り返り、ジョンが顔を真っ赤にしてまくしたてる。

「ち、違います！ な、何を仰りますつ！」

「だつて、マリーエレン様は伯爵様の妹君でしょつ……」

ジョンがジユビリーを兄と呼んでいることを指摘するキリエ、マリーエレンが苦笑する。

「違うのですよ、キリエ様」

そして、少しだけ寂しげな表情で続けた。

「ジョンは……、兄の亡くなつた妻、エレオノール様の弟なのです」「えつ……？」

思いも寄らなかつた言葉に、キリエは思わず絶句する。あの伯爵に、妻が。もちろんあり得ない話ではないのだが、ずいぶん意外な感じがした。しかも、すでに亡くなつてゐるとは。

「……もう八年も前のことです」

少し遠くを見るような目つきでジョンが呟いた。ほんの少しの間、思ひ出に浸るような表情を見せるが、すぐにまた笑顔を見せる。「それより、キリエ様。私のことはどうぞジョンとお呼び下さい。私など、田舎の子爵に過ぎません。もちろん、キリエ様が女王に即位されてからも、ずっとお仕えする所存です」

「でも……」

「そうですよ。あなたは女王になられるお方なのですから」

マリーエレンも先ほどのことを繰り返した。

「私のことはマリーとお呼び下さこ。今からクレドへ帰らねばなりませんが、キリエ様の身の回りのことはこれから私が全てお引き受けいたします」

キリエは恐る恐る一人の顔を見比べた。ジユビリーと違つて穏やかで柔らかな表情の一人に見つめられ、キリエは小さく頷く。そして深々と頭を下げ、どもりながら囁く。

「よろしくお願ひします。……ジョン、マリー

ジョンとマリーは顔を見合わせ、微笑んだ。

何とか気を落ち着かせたキリエを部屋へ連れて行く途中、マリー・エレンが不意に足を止めた。壁に掲げられた一枚の肖像画を見上げるとキリエに指し示す。

「キリエ様。このお方があなたの母君、レディ・ケイナ・アッサーですよ」

「えつ」

言われて慌てて見上げる。そこには、上品な深いワイン色のガウンをまとい、ブーケを手にした若い女性が描かれていた。わずかに切れ長な瞳。微笑が浮かぶ唇。キリエと同じ、濃い栗毛。病弱にも見える、雪のように白い肌。確かに、キリエにもその面影がある。これが、自分の母親……。今まで想像もできなかつた母の姿。それが突然、こんな形で会おうとは。高名な画家の手によるもののが、格調高い氣品ある画風にキリエは思わず息をひそめて見つめた。

「……十五歳でお亡くなりになりました。キリエ様は、まだ二歳でいらっしゃいました」

「十五……。キリエは思わず息を呑んだ。そんな年齢で、この世と別れを告げたのか。まだ幼すぎる娘を遺しての旅発ちは、どんなに辛かつただろう。

「……マリーは、母を存知ですか？」

「はい。お綺麗で……、静かなお方でした。キリエ様はよく似ていでですわ」

上目遣いで母の肖像を見つめるキリエに、マリーがそっと肩に手をかける。

「私たちの領地は隣り合っていたので、よく遊びに来たものです。まるで、お姉様のようごく面倒を見ていだきました。私たちは幼い頃に両親を亡くしていましたから……」

マリーの懐かしさを噛み締める言葉に、キリエは思わず彼女を見上げる。そして、そつと肖像画を振り返る。絵の中の母は、心なしか寂しげに見えた。

夕方にマニーとジョンがクレドへ向かつた後、キリエは部屋で夕食を出された。

「おじい様の容態は？」

「残念ですが……、よくありません」

侍女は暗い表情で短く答える。他にも色々聞きたいことがたくさんあつたが、暗い表情の侍女にはそれ以上声をかけられず、また、侍女が答えられるかも疑わしかった。黙つて食事を口に運んでいたと、扉を静かに叩かれる。

「伯爵」

伯爵と聞いてキリエは思わず手が止まる。静かに入ってきたジュビリーは、立ち上がりうとするキリエを手で制する。

「少し外せ」

その一言で侍女は黙つて部屋を退出していった。

「明日、夜明けと共にイングレスへ向かう」

相変わらず冷たい表情のまま、ジュビリーが言い放つ。

「クレドとグローリアの軍と共にフレセア宮殿へ入城し、王位の宣言を行う。おまえの出自を確認する作業があるだらうが、問題ないはずだ」

「ま、待つて下さー」

キリエが青ざめた顔で口を挟む。

「お、王位の宣言つて……、わ、私がですか？」

「おまえがしなくてどうする」

「ほ、本気なのですか。私が、女王になれると、本気でお考えなのですか？」

「□」もりながら問い合わせるキリエに、ジュビリーは辛抱強く、ゆっくりと言ひ含めた。

「心配するな……。おまえが明日、王位を宣言したとしてもすぐ女王になれるわけではない。戴冠しなければ国民や議会から王位を継承したとは認められない。戴冠権を持っているのは、クロイツのム

ンディ大主教だ。イングレスの聖アルビオン大聖堂で戴冠式を挙げて、初めて女王に即位することができる」

「ムンディ大主教。

プレシアス大陸及びアングル島で広く信仰されているヴァイス・クロイツ教の総本山、聖都クロイツの支配者。ムンディ大主教は精神世界における事実上の支配者だ。キリエはまさか大主教の名が出てくるとは予想しておらず、目を見張った。

「……大主教……」

ロンディニウム教会のような田舎の小さな教会については、一生拝謁の榮に浴することはないであろう人物。キリエは、ようやく自分の置かれた状況を理解し始めた。

「まずは王位の宣言を行い、国民と議会から支持を得た後にクロイツへ戴冠を要請することになろう」

「で、でも、私は修道女です！」

我知らず叫ぶキリエ。だが、ジュビリーの冷たい目に射すくめられ、恐れの表情が一段と増す。

「私は……、一生を神に捧げる誓いを……、修道誓願を立てた身です。祖父の後を継いで爵位を相続したり、その上、君主になろうなど……、大主教があ許しになるはずがありません……！」

「……それはどうかな」

思わず言葉にキリエは眉をひそめる。ジュビリーは腰を屈め、キリエの耳元で囁く。

「ムンディはむしろ、おまえがアングルの君主になることを望むだろうな。プレシアス大陸の強国、エスタドのガルシア王はヴァイス・クロイツ教を蔑ろにし、大陸の霸権を握ろうとしている。ムンディは、ヴァイス・クロイツ教の修道女であるおまえがアングル女王になることでエスタドを牽制できると期待するだろ？ ムンディにとつて悪い話ではない」

「そんな……」

思わず涙ぐむと、キリエは両手で顔を覆つた。自分の信仰の指導

者が、そんな政治的駆け引きを望むなど、認めたくないなかつた。世界は、自分が予想していたよりももっと醜く、恐ろしいものなのか。

「……キリエ」

ジュビリーが更に言葉を続ける。

「……おまえにとつては受け容れ難いことばかりだろう。だが、時間がないのだ。早くしなければ、ガリアから冷血公が舞い戻る」

冷血公の名を聞いてキリエは体を震わせた。

「奴の悪評はおまえも耳にしているはずだ。あの男が王になれば……、間違いないこの国は滅びる。それを止めることができるのにおまえだけだ」

「……」

キリエは恐る恐る顔を上げ、不安に満ちた目をジュビリーに向ける。

「待つて。では、ルール公は、私の……」

ジュビリーは険しい顔で頷く。

「異母兄だ」

一瞬、部屋に冷たい空気が張り詰める。キリエはかすかに体を震わせた。だが、そんな彼女にジュビリーは更に追い討ちをかけた。

「それだけではない。王位継承権を持つ者は他にもいる。レノックス・ハートがガリアで戦っている相手……。王太子ギヨーム、彼もだ」

「えつ……！」

「彼はガリア王リシャールと、王妃マーガレットの嫡男だ。マーガレット王妃はエドガー王の妹。つまり、アングルの王位継承権とガリアの王位継承権、どちらも保持している。おまえにとつては、従兄にあたるわけだが

なんということだ。キリエは呆然とした。プレシアス大陸の霸権をかけた戦いの渦に、今から自分は身を投じようとしている。だが、それでもまだ、自分のことではないような感覚がどこかにあった。これは、どこか遠い異国の話。自分はその物語を聞いているだけ……

…。

「レノックス・ハートを君主にするわけにはいかん。とは言え、異国の王太子を君主に迎えることも避けねばならん。おまえが女王になれば、アングルが望む未来になる」

ジュビリーはそこまで語り終えると、キリエの疲れきった表情に気づき、そつと肩に手をかける。

「……疲れただろう。食事を済ませたら早く休め

キリエは無言で頷くが、その瞳は空ろだった。

今日という一日は、自分にはわからないことの連続だった。精神的にも肉体的にも疲れきっている。考えなければならないことが多すぎる。そして、考えてもわからないことだらけだ。

ジュビリーの言葉が脳裏に蘇る。彼は自分を女王にすると言った。遠縁だとも言った。つまり、自分を女王にして、彼は宰相になるつもりか。ヴァイス・クロイツ教では、十八歳に達して初めて成人と認められる。キリエはこれまで孤児として育てられてきたため誕生日がわからず、聖ロンドィニウムの祝祭日である六月十日を誕生日の代わりに祝つてきた。つまり、今月十四歳になつたばかりだ。成人までには四年ある。四年もあれば、この国を手中に入れられる。自分が今まで知らずにいた世界が、自分を中心に動こうとしている。そのことにキリエは怯えながら、疲れを癒すためではなく、現実から逃避したいがために寝床へと就いた。

## 第1章「ロンティニアム教会の修道女」 第2話（前書き）

教会を連れ出されたキリエは祖父と再会を果たす。だが、再会の時  
はあまりにも短かった。

「キリエ、よいか。決してくじけてはならぬ……！」

## 第1章「ロンティニア教会の修道女」 第2話

「少ないながら、トウリーの兵も呼び寄せました。イングレスでは何が待つていいかわかりませんからね」

クレド城では、ジョンが普段よりもやや興奮した面持ちでマリー・エレンに話しかけていた。

「王太后は以前から人望のあるお方ではありませんでしたから、宮廷でキリエ様を歓迎する者も多このではないでしょうか。とは言え、油断はできませんが」

「そうね……」

マリーの気のない返事にジョンが振り返る。マリーは眉間に皺を寄せ、窓から夜空を見上げている。

「マリー様?」

ジョンの呼びかけに、まっさと我に返ったように慌てて振り返る。

「…………ごめんなさい」

「…………どうなさいたのです?」

「…………嫌な予感がするわ」

マリーの一言に、ジョンは思わず黙り込んだ。

「今更、もう後に引けないことはわかっているけれど……。明日、イングレスでキリエ様が王位宣言を行ったとして、本当にムンディ大主教は戴冠を認めてくださるのかしら。そして、戴冠できたらともその先は……。不安なことばかりだわ」

「……エスター、ゴヴォーレン、クラシヤンキ帝国……。大陸の列強は、君主不在のアングルを狙うでしょう。アングルの王位継承権を持つガリアのギヨーム王太子の反応も気になります」

ジョンは重々しく息をついた。

「ルール公に対抗できるだけの仲間が必要ですね」

「レスターが色々情報網を張り巡らしているけれど……、時間がな  
いわ

マリー・ヘレンはちらりと青年に視線を投げた。生真面目な顔つきに不安の色を滲ませ、頭の中で必死に様々な言葉を探しているのが見てとれる。

「……ごめんなさい、ジョン」

「はい？」

「あなたも巻き込んでしまったわ」

その言葉にジョンは顔を強張らせ、居住まいを正した。

「いいえ。私が自ら志願したのですよ。義兄上のためでもあります。が、姉のため……、そして私自身の誇りのためです。マリー様がお心を痛めることはありません」

真っ直ぐに田を見て言い切るジョンに、マリーは寂しげに微笑んだ。

「……ありがとう」

そして再び夜空を見上げ、小さく呟いた。

「もう、あれから八年ね……」

温かい腕に抱かれ、微笑みを浮かべたたくさんの人々にのぞき込まれている。そのうちのひとりが自分を抱き上げ、周りに笑い声が上がった。やがて床に降ろされ、手を引かれると覚束ない足取りでゆっくりと歩む。と、不意に背後から悲鳴とどよめきが起こり、振り返った瞬間、風を切る音が耳を突く。瞬間、視界が暗転した。暗闇のまま、人々の悲鳴と怒号、金属がぶつかり合う音などが続く。不安と恐怖に駆られ、泣き叫ぶ。その時、怒り狂った男の罵声が響いた。

「氣でも触れたか！ その娘を殺せッ！」

そこでキリエは田を覚ました。

「……」

両田を見開き、荒い呼吸を繰り返す。喉元には生暖かい汗が流れている。幼い頃から時々見る夢だ。特に、疲れた時や悩み事がある

時などが多くつた。久しぶりにみた悪夢に、キリエは不吉な思いで喉元の汗を拭う。

この夢をみた時、いつも思うことがあつた。気が触れた娘とは、一体誰なのか。それが、もしも自分のことを指しているとしたら……。キリエは表現しようがない重苦しい不安と罪悪感で部屋を見渡した。石造りの重々しい雰囲気の寝室。今まで使つたこともなかつた天蓋付きの寝台。上質のシーツに、美しい刺繡の施されたキルトが掛けられている。窓からは青白い月光に照らされた櫻の木が黒々と枝葉を伸ばしていた。

夢のせいでの寝付けなくなつたキリエは、とうとう我慢できなくなつてそつと寝床から抜け出した。静かに扉を開け、暗い廊下に出る。廊下の壁に所々燭台が置かれ、ちらちらと明かりが揺れている。ベネディクトの寝室はどこだつただろう。小さな教会から出たことがなかつたキリエにとって、巨大なグローリア城は迷路のような場所でしかなかつた。暗い廊下を不安げに歩き出してしばらくすると、

「…………キリエ…………」

誰かに名前を呼ばれたような気がして立ち止まる。

「…………誰…………？」

「…………キリエ…………」

小さな声がした。そちらを振り返るが誰もいない。キリエは声がした方へ歩き出した。衣擦れの音がする。

「誰…………？」

もう一度呼びかけるが答えがない。キリエは暗い廊下で転ばぬよう、壁伝いに小走りに歩く。

「キリエ…………」

女の声だ。誰だ。キリエは恐怖や不安もなく、声を追いかけた。声の主はキリエの歩みを待つかのように時々呼びかけ、衣擦れの音を合図のよにして彼女を導いた。何回か階段を上がり、さすがに息を切らしたキリエは立ち止まって呼吸を整えた。その時、

「キリエ」

「ひつ……」

唐突に名を呼ばれ、短い悲鳴を上げる。

「……は、伯爵様！」

胸が割れんばかりに波打ち、キリエは上ずつた声で囁いた。暗がりからジュビリーが足音も立てずに歩み寄る。

「どうした」

「……あ、あの……」

キリエは思わず金縛りにでもあつたよつて立つてへぬけた。ジュビリーは顔をしかめ、わずかに首を傾げる。

「……どうやつてここまで来た」

「……」

城内を出歩いたことを咎められたよつて、キリエは青くなつて黙り込んだ。怯えた表情に気づいたジュビリーは慌てて言い直す。

「眠れなかつたのか」

黙つたまま見つめてくるキリエに、ジュビリーは少し穏やかな表情を見せた。遠くの燭台の灯火が、一人の顔をぼんやりと照らす。昼間と違つてキリエは頭布を被つておらず、わずかに波打つた濃い栗毛が印象的だつた。ジュビリーは目を細め、体を固くしている少女を見つめた。修道女の服を脱いだとしても、身も心もまだ修道女のままだ。その身に王の血が流れていなければ、こんな場所へ来ることもなかつたろう。冷え切つたはずの心が、ほんの少し痛む。だが、もう決めたのだ。この娘を女王にすると。

「……おじい様が、心配で……」

小さな声でキリエが訴える。

「……お願いです。おじい様の側にいさせて下せ。あのまま、お別れになるなんてことになれば、私……」

どんどん小さくなつていいく声を最後まで聞くと、やおらジュビリーはキリエの手を取ると階段を上がり始めた。

「は、伯爵様？」

その言葉にジュビリーが立ち止まり、鋭い目つきで振り返る。

「これから女王になる者が臣下を敬称で呼んでビリスする。おまえはこれから、多くの貴族から臣下の礼を受けるのだぞ」

「で、でも、どう呼べば……」

「バートランド、それが無理ならただ伯爵と呼べ」

そう言い放つジユビリーを、黙つて見上げていた時。

「伯爵ッ」

階上から不意に呼びかけられる。一人が振り向くと、そこにレスターが佇んでいる。

「キリエ様もおられるのですか？」

「どうした」

「ベネディクト様が

「！」

二人が急いで階段を上ると、数人の従者が廊下を慌しく行き交つていて。

「おじい様はッ？」

ジユビリーが黙つてキリエの手を引いて急ぎ足で部屋へ向かい、静かに扉を開ける。扉が開く音で、中にいた医師が振り返る。そして、キリエの顔を見ると険しい表情で頭を振る。

「ベネディクトは

「…………」

医師はジユビリーの問いかけにも答えようとしない。キリエが走つて寝台へ近づくと、ベネディクトは喘ぎながら必死で呼吸を繰り返していた。

「おじい様ッ」

ベネディクトの瞼がぴくりと痙攣する。

「おじい様、キリエです。おじい様！」

瞼が瞬きすると、濁った目がゆっくりキリエの顔を見つめる。

「…………」

唇が、キリエの名を呼ぼうとかすかに動く。キリエは跪き、祖父の口元に耳を近づけた。

「……キリエ……」

「おじい様！」

「！」幸運を……」

死に臨んでも孫の幸せを願うベネディクトに、キリエの田から涙が溢れる。

これまで、修道女として教会で死者と向き合つ日々だった。しかし今、初めて血の繋がる者と出会い、その臨終に立会っている。家族が死ぬということは、こんなにも寂しく、心細く、悲しいものなのか。修道女でありながら、自分が今まで人の悲しみの半分も理解していなかつたことを初めて知つた。キリエがベネディクトの手を握ると、彼はなおも唇を開いた。

「……頼む……」

「何？ おじい様」

キリエはさうに耳を近づける。ベネディクトは力を振り絞つて言葉を発した。

「……彼を……、救つてくれ……」

キリエは両目を見開いた。そして、祖父の顔をまじまじと見つめる。その田には苦痛だけでなく、深い悲しみが見てとれた。

「……救つ……？」

ベネディクトはキリエの手をぐつと握りしめ、耳元で必死に囁いた。

「そうだ……、バートランドを……、ジユビリーを、救つてやつてくれ……」

ジユビリーを救つてほしい。死に瀕した状態で、何故そんな願いを？ キリエは混乱した。

「おじい様、どうしたこと？ おじい様……！」

「ベネディクト様……！」

背後にやってきたレスターに田を向け、ベネディクトは苦しげに囁く。

「……レスター……、後を……頼むぞ……」

「……！」

すると、突然ベネディクトが喘ぎ始めた。

「いかん」

医師がキリエを押しのける。

「おじい様！」

「離れて！ レディ・キリエ」

ベネディクトは呻き声を上げ、胸を掻き鳴らす。

「おじい様！」

「ベネディクト」

キリエの絶叫が空しく響く。ベネディクトはがくがくと痙攣を繰り返すと、やがてがくじと頭を垂れた。室内に、沈黙が広がる。

「……」

医師が首に手を押し当てる。キリエを振り返る。

「……おじい様？」

「……お亡くなりに」

キリエは両手で口元を覆うとその場に座り込んだ。レスターが思わず片手で顔を覆い、口惜しげに呻き声を漏らす。

「ベネディクト様……！」

嗚咽が響く中、ジュビリーは無言でベネディクトの遺体に歩み寄つた。しばらく黙つたまま見下ろすと、瘦せたその顔に手を這わせ、目を閉じる。何かを、決意するかのように。

翌朝。そのまま眠らずに夜を明かし、一晩中祈りを捧げていたキリエは、ぼんやりとした表情で椅子に腰掛けていた。やがて外から聞こえてくるざわめきではっと我に返る。窓からそつと外を窺うと、城門から軍勢が整然と行進していく。

「……ジョン様」

武装したジョンが軍馬に跨り、軍を率いている。

「キリエ様」

「……」

不意に名を呼ばれ、飛び上がって振り返る。そこには昨夜の侍女がひつそりと佇んでいた。

「い)出発の準備を。お着替えを用意してい)ぞこます。衣装部屋へ」

「……はい」

言われるままに部屋を連れ出される。城内は慌しかつた。一方ではキリエの出発を準備し、一方ではベネディクトの葬儀の準備に追われている。この異様な雰囲気に、キリエの胸は重く締め付けられた。数人の侍女が待機していた衣装部屋で、キリエは今まで見たこともない豪奢な衣装を示され、唖然とした。

「わ、私、こんな贅沢な衣装は……」

「今から王都で王位の宣言を行つのですよ。粗末な衣装でプレセア宮殿へ入城すれば、貴族たちから嘲笑されます」

乾いた声でそう諭され、キリエは否応なしに着替えさせられた。

「プレセア宮殿にはまだ王妃、いえ、王太后がいらっしゃいますし小さく呟く侍女の言葉に、キリエは眉をひそめた。

「……ベル王太后?」

「ええ」

ベル・フォン・コヴォーレン。崩御したエドガー王の妃だ。王と王妃の諍いが絶えなかつたといつ噂は、このロンディニウムにも伝わっていた。教会でも、ボルダーが暗にエドガーとベルのことを引き合いに出し、家庭を円満にすることが幸福につながると説教していたことがあつたほどだ。

エドガーとベルの間には嫡男エドワードがいたが、狩りの最中に落馬したことが原因で十歳という幼さで亡くなつている。そのこともあって、次々と庶子を生む愛妾たちに対し、王妃は露骨に敵意を見せていたというから、キリエに対しても好意的なはずがないだろう。キリエは憂鬱そうに溜め息をついた。と、その時、彼女は眉をひそめた。

(王太子……)

父と妃の息子といふことは、亡くなつたエドワード王太子は自分

の異母兄だ。キリエは不吉な胸騒ぎを感じた。今まで知らされていなかつた事実が次々と姿を現してくる。自分は、一体誰なのだ？

これから、どうなるのだ？

不安そうなキリエに構わず、侍女たちは手際よく衣装を着付けてゆく。金襷で縁取られた目にも鮮やかな青いワンピース。幾重にも重ねられた上質なペチコート。今まで触れたこともなかつた金銀の装身具。長い栗毛は綺麗に結い上げられた。仕上げに化粧を施すと告げられたが、キリエはそれだけは頑なに拒んだ。長年教会で育つてきたキリエにとって、化粧はどうしても背徳行為にしか思えなかつたのだ。装身具すら、彼女は用意されたものの半分ほどしか身につけようとはしなかつた。

「失礼」

衣裳部屋の扉の向こうから、レスターが声をかける。

「お着替えは？」

「そろそろ終わります」

「お食事をご用意しております。出発が迫つております故……」

レスターの言葉にキリエは俯いた。

「……食欲がないわ」

「少しでもお召し上がり下さいませ。イングレスまで三時間はかかります」

侍女がぴしゃりとたしなめる。ようやく着替えが終わり、危なつかしい足取りで部屋から出てきたキリエに、レスターが満足げに頷く。が、その顔は一晩で老け込んだように見える。

「おお。昨日の修道女姿からは想像もつかないお姿ですね。結構結構」

慣れない衣装にてこずりながら朝食を済ませた後、キリエは城の礼拝堂へ向かつた。礼拝堂という名ではあつたが、その豪華さは目を見張るものがあつた。手入れの行き届き具合を見る限り、ベネディクトは生前から信仰を大事にしてきたらしい。礼拝堂に安置された棺の中で、盛装されたベネディクトが静かに眠りについている。

棺の側で跪くと、キリエは両手を合わせた。

「……あなたの御靈が天使に導かれ、雲間に居ます神の下へと、迷うことなく向かわれることを祈ります……」

淀みなく呴く祈りの言葉が、やがて途切れ途切れになる。

「……あなたが残した……、多くの善行が……、神に認められ……、天で祝福されますよう……」

キリエの閉じた眦から涙が溢れ出す。今まで何度も唱えてきた死者への哀悼の祈り。まさか、血の繋がつた者のために唱える日が来ようとは思つてもいなかつた。それでも祈りの文句を最後まで詠唱すると、キリエは静かに立ち上がつた。ベネディクトの頬にそつと唇を押し当てるとその死に顔を見つめる。

「おじい様……」

沈黙のベネディクトに、キリエは心の中で呼びかけた。

（伯爵を救うとは、一体どういうことなのですか。彼を、何から救えれば良いのですか）

答えを得られないまま、キリエはベネディクトに別れを告げた。侍女たちに見送られて礼拝堂を後にすると、レスターが一人佇んでいる。

「キリエ様。……」ちらへ

言葉少なげに呴くとキリエを導く。礼拝堂を出て城の裏手へ回ると、夏の花で彩られた庭園が広がつている。教会の薬草園を思い出したキリエは、思わず胸が詰まつた。庭園の色鮮やかな花々は、二人を黙つて迎え入れた。

「……キリエ様」

低い声で呼びかけると、レスターはある一角を指し示した。

「こちらが、レディ・ケイナの墓標でござります」

「……！」

キリエは息を呑んで立ち尽くした。石のよつに固まつて動かないキリエに、レスターは寂しげな微笑を浮かべるとそつと肩に手を添える。

「どうぞ」挨拶を。ベネティクト様同様、ケイナ様もキリエ様にお会いしたかつたはずです」

キリエは覚束ない足取りでゆっくりと歩み寄った。草むらに隠れるように、母の墓標はひつそりとそこへ横たわっていた。冷たく硬い石に、「我が慈愛は祈りと共に」と刻まれている。キリエは静かに跪くと、恐る恐る手を伸ばし、墓標に触れる。

「……お母様……」

口の中でそつと呟いてみる。昨日見かけた母の肖像画が脳裏に蘇ると同時に、キリエの目から涙が溢れ出た。

何故、こんなことになったのだろう……。何故、自分には母の記憶がないのか。何故、自分は母と引き離され、身分を隠され、真実から遠ざけられていたのか。それが、自分の身を守るためにわかれても理解できなかつた。十四年前に、何があつたのだ。

キリエは涙を拭つた。墓標の上の部分に、蝶の紋章が刻まれている。指輪と同じものだ。キリエは右の手のひらに口づけると、そつと墓標に添えた。

「行つてまいります。……母上」

そして、両手を合わせると静かに祈りを捧げる。と、草を踏む靴音が耳に入り、はつと後ろを振り返る。そこには、正装したジュビリーが背後に佇んでいた。相変わらず冷たい表情だが、その目にはどこか同情の色が感じられる。

「……良いか

「……はい」

キリエは墓標をもう一度振り返つてから立ち上がつた。

「キリエ様」

背後からレスターに呼びかけられ、立ち止まる。

「私はここでグローリアとクレドの守備に務めます。ご成功をお祈りしております」

固い表情で頷くと、キリエはジュビリーに促されるまま庭園を後にした。

「私はレノックス・ハートなど認めぬ！」

耳を突く刺々しい叫び声に、廷臣たちは苦労してうんざりした表情を押し隠す。

「しかし、王太后。早晚ルール公はお戻りになられます。早く次期君主を決めねば、なし崩し的にルール公が王位を継承してしまいますぞ」

王太后ベル・フォン・コヴァーレンは、廷臣が王ではなく、わざわざ君主モナークと呼んだことに田代とく反応した。

「そなたは王より女王が良いのか？」

「そうではございませんが……」

今度ばかりは不快な表情を隠そうともせず、廷臣は正直に言上した。

「王位継承権を持つ者は男性とは限りませんからな」

「ルール公だけは許さぬ。あの野蛮な獸モノ……。あれがこのプレセア富殿の玉座に座ると思つただけで虫唾が走る……！ 国民のためにもならないわ」

「それはそうですが……。そつとなれば他の王位継承権を持つた人物に……」

「私の甥はどいつ？」

「は？」

その場にいた廷臣たちがいぶかしむ。

「コヴァーレンのヘルネスト王子よ。冷血公よりは適任ではないかしら？」

「とんでもない……！ ハドガーブの血を引かぬお方をアングルの君主に迎えるなど……！ 国民の理解を得られません！」

「それに、ただいまホワイトピークに早馬を遣わしております。ホワイトピーク公にもお伺いを立てねば」

ホワイトピーク公。その名にベルは黙り込んだ。

「公爵は先々代の王、アルバート・オブ・アングル様の庶子の二長

男でいらっしゃいます。傍系と言えど、アングル王家の血脈を受け  
ております」

ベルはその美しい顔を歪めた。アングルの要衝、軍港ホワイトピ  
ークを守るホワイトピーク公爵ウイリアム・デーバーは、エドガー  
の父アルバートが寵愛した庶子サラ・デーバーの長男だつた。エド  
ガーにとつてサラは腹違いの姉であり、ウイリアムは甥になる。

その時、まるでその頃合いを見計らつていたかのよつて廷臣が大  
広間に駆け込んでくる。

「ホワイトピークから使者が帰還しました！」

皆が振り返ると、廷臣は息を整えてから言上する。

「公爵のお言葉をお伝えいたします。『自分はホワイトピークを盾  
にアングルを守ること』が使命である。王位の継承に名乗りを上げる  
ことは許されない』」

その言葉に廷臣たちが溜息をつく。

「やはり……」

ウイリアム・デーバーは堅物で生真面目な男として知られており、  
だからこそ王位に相応しいのでは、という声も上がっていたのであ  
る。

「そして

なおも廷臣が声を上げる。

「こう仰せられました。『エドガー王には嫡子でなくともお子がい  
らっしゃる。庶子と言えど、先王直系の子孫が王位を継承すること  
が望ましい』と」

大広間が沈黙に包まれ、廷臣たちは戸惑つた様子で顔を見合わせ  
た。ベルはひとり、いろいろした様子で口元を歪めている。

「…………しかし、陛下のお子となると……」

「やはり、ルール公ということに……」

人々が諦めの表情で溜息をつく。その重苦しい空気を破るように、  
慌しく数人の侍従が駆け込んでくる。

「申し上げます！」

皆が今度は何事かと顔を上げる。

「先ほどグローリアから使者が参り、現在グローリア女伯がこちらへ向かっているとのことです！」

ベルの顔が引きつる。

「グローリア、女伯……？」

その場に居合わせた人々が顔をしかめる。

「グローリア伯はまだご存命のはず。体調を崩されていると聞き及んでいたが……」

その時、ひとりの騎士がはっと顔を上げた。

「…………レディ・キリエ・アツサー！」

その名に入々は息を呑んだ。ベルの顔色がさつと青ざめる。

「…………キリエ、アツサー…………！」

ベルは顔を歪め、苦々しげに吐き棄てる。

「あの……、あの女の娘か！」

「落ち着いて下さいませ、王太后」

富廷侍従長、セヴィル伯が侍従に問いただす。

「其の者は？」

「クレド伯が先導しているとのことです」

クレド伯という名を耳にして、その場がざわめく。

「クレド伯？ 何故…………！」

その疑問に先ほどの騎士が身を乗り出す。

「グローリア伯はかつて、クレド伯の後見人でいらっしゃいました

故

「しかし……」

廷臣たちの言い合いで、ベルが玉座を立つ。

「あの妾腹を女王に就ける気か！ もしもそうなれば私はどうなる

！ ノヴェーレンに帰れと申すか！」

「レティ・キリエは修道女になられたはず。『自分から王位を望むとは考えられませぬ。いずれにしろ、彼女の出方を待つしかないかと

煮え切らない廷臣たちの態度に苛立つたベルは怒りのぶつけようもなく、大広間を飛び出した。

「さて……、どうなるかな」

セヴィル伯が困り果てた様子で呟くと、廷臣たちが彼の周りに集まつてくる。

「キリエ・アッサー……。あの幼かつた娘が帰つてくるというのか」「しかし、エドガー王の血を引くことは確かだ。冷血公がアングル王に就くことを考えれば、修道の方がまだ良いというのも」「しかし、傀儡には使えませんな」

ひとりが陰険な表情で囁く。

「クレド伯爵……。確かに彼はアッサー家と遠縁に当たるはずだ」

「……宰相の座に納まるつというわけか」

一同は重々しく溜め息をついた。

「久しく見かけていなかつたが……」

「細君に死なれてからは領地に引き籠もつていたからな」

「モーティマー、そなたはクレド伯と親しかつたであろう」

皆の視線を集めたのは、先ほどの若い騎士だった。国王直属秘書官、サー・ロバート・モーティマーだ。

「親しいといえるほどでは……」

彼は口ごもると、緊張した顔つきで付け足した。

「一度、護送任務に同行させていただいだけです」

モーティマーは、野心的な雰囲気であつても、宮廷では決して出しゃばるような人間ではなかつたジュビリー・バートランドの姿を思い起こした。その記憶は決して楽しいものではない。だが、それはジュビリーのせいではなかつた。

「レディ・キリエ……。国内にいる王位継承権者の中で最も適した人物である以上……、入城を拒む理由はありませんね」

「しかし、ルール公は？」

ひとりがそう問いかけ、セヴィル伯は苦しげに唸つた。

「……黙つてはあるまい」

キリエ一行の元にプレセア宮殿の使者が出迎えにきたのは、イングレス郊外に差し掛かった頃だった。沿道で周辺の住民たちが不安に遠巻きにして見守る中、使者は丁寧な挨拶をもって迎えた。「プレセア宮殿より、レディ・キリエ・アッサーをお迎えに参上いたしました」

「……どなたの命だ?」

下馬し、短く問い合わせるジュビリーに対し、使者は複雑な顔をしてみせると、曖昧な答えを返した。

「……宮殿の廷臣は皆、レディ・キリエ・アッサーの入城を歓迎いたしておりますが、歓迎していない者もあります」

「ベル王太后かな」

返事をする代わりに、使者が苦笑する。

「……」「安心下さい。今や王太后の力は無きに等しい状況にござります」

「……先を急げ」

表情を変えず、ジュビリーはそう言い放つと再び馬に跨った。それから一時間もしないうちに、一行はイングレスに入った。アンダル王国の都イングレスは、ブレシアス大陸から切り離された場所であるにも関わらず、巨大な都市の様相を呈していた。十万人近い市民がひしめき合つように暮らし、名実共に文化の中心地であった。

市民で埋まつた大通りを隊列が縫うように行進してゆき、物見高いイングレスの市民たちは驚きと不安のこもつた目で見守った。市民にとつても、王位継承問題は自分のたちの生活を左右する一大事であつた。悪評高い 冷血公 に比べれば、全くの無名であつてもロンディニウム教会の修道女 の方が印象は良い。だが、この島国を巡つて大陸の列強は虎視眈々と付け入る隙を狙つてゐる。そんな国を背負つていけるのか、その不安も拭いきれなかつた。

「……ここが、イングレス……」

初めて見る 都市 にキリエは田を奪われた。村では見ることのない、せめぎあうよにして林立する建物。彩り鮮やかな品々が並ぶ市場。着飾つた者たちと、キリエの軍勢など田に入る様子もない物乞いをする者たち。豊かさと貧困、華やかさと醜さが同居する都を、キリエはどう受け止めてよいかわからなかつた。

やがて、軍はプレセア宮殿に差し掛かつた。プレセア宮殿は市街地を貫くノーヴァ川を堀の代わりにしており、川の上には跳ね橋が架けられている。中庭で近衛兵たちが出迎えのために整列しているのが見える。橋門をぐぐつたところで、ジュビリーはキリエを馬車から降ろした。

「あッ」

裾を踏みつけて転がり落すつになるキリエを、ジュビリーの大きな両手が支える。

「「、「めんなさい……」」

ジュビリーに抱きかかえられるようにして地に足をつけると、顔を真っ赤にして咳く。

「慣れない衣装だ。気にするな」

言葉とは裏腹な冷たい口調にキリエは、ぐくりと唾を飲み込む。

「落ち着いたらマリー・エレンを呼び寄せる。宫廷には宫廷の儀礼がある」

宫廷儀礼を学ぶ前に王宮へ押しかけるということは、それほど迫切した事態といつことなのだろう。確かに、王位継承に一刻の猶予も許されない。

息を整えると、キリエは辺りを見渡した。ぐるりと囲む衛兵たち。その周りにひしめく貴族たち。まるでキリエを呑み込むかのように聳え立つ宮殿。彼女は、足がすくんだ。震えを感じながら思わず背後を振り返ると、門の外では市民らが固唾を飲んで見守っている。

貴族たちは、キリエの不均衡な姿に田を奪われた。田の覚めるような美しい青のドレスをまといながらも、顔にはほとんど化粧を施さず、装身具も申し訳程度しか身につけていない。それでも、幼く

も無垢な瞳を持つ少女に、賞賛の溜め息が零れる。

アプローチ

やがて、歴代君主の紋章旗がはためく導入室間に通されると、きらびやかな内装にキリエは息を呑んだ。グローリア城と違い、華やかな装飾が施され、まるで異国にでもいるかのような感覚に陥る。豪奢な絨毯が広間を覆い尽くし、極彩色のタペストリーに混じつて数々の絵画が掛けられている。が、何体もの甲冑が飾られているのを見て、キリエは不安と緊張を感じてドレスの裾をぎゅうと握りしめる。廷臣や貴族たちが遠巻きで固唾を飲んで見守る中、数人の廷臣たちがこちらへやつてくる。

「グローリア女伯」

廷臣たちは皆、深々と最敬礼してみせた。ひとりの騎士が前へ進み出ると恭しく跪く。

「プレセア宮殿へよつこひらつしゃいました。我々は女伯を歓迎いたします。私は亡きロドガー王の首席秘書官、ロバート・モーティマーと申します」

キリエは恐々と手を合わせると頭を下げる。そんな幼い少女にモーティマーはどこか懐かしげに笑いかけた。そして、首を巡らすとジユビリーに向かつて一礼する。

「お久しぶりでござります」

それに対しても、ジユビリーはかすかに頷いただけだった。  
「では、ご案内します」

モーティマーが先導して歩み始めると、キリエは恐る恐る後に続いた。

その時、前方で突然ざわめきが起つたかと思うと、人だかりがさあっと左右に分かれた。通路の先に、緋色のドレスをまとった黒髪の美女が佇んでいる。並み居る貴族たちよりももっと高貴な人物であることが、キリエにもわかつた。では、この女性がベル・フォン・コヴェーレンか。

ベルは、青白い顔つきでキリエを正面から見据えていた。後ろに控えている女官たちは、いつ王太后が癱瘓を起すかと不安げな表情

で見守っている。しばらくその場に立ち廻っていたベルは、ゆっくりとキリエに向かって歩き出した。キリエも数歩歩み寄ったが、不意にどよめきが起る。キリエが両手を合わせて片膝を突き、教會式に恭しく最敬礼をしたのだ。貴族や兵士たちのどよめきが続く中、ベルは眉をひそめた。

「キリエ……、キリエ・アツサーと、申します。天なる神に、お恵みと今日の出会いに感謝いたします。……身罷られた國王陛下エドガー・オブ・アングル様の御靈が、神に祝福されますよ!」

「！」

エドガーの名を耳にしてベルはかッと頭に血が上った。が、モーティマーが鋭く振り返り、彼女は息を吐き出すと氣を落ち着けた。

「……よう参られた」

かすれた声でそう呟くと、ベルはモーティマーに命令を下す。

「はつ」

それだけ言い放つとベルは踵を返し、女官たちを伴つて引き上げた。その様子を見守るジュビリーの口元に冷たい笑みが浮かぶ。キリエがベルに対しても上級の礼を尽くしたこと、キリエの評価は上がったはずだ。廷臣たちは一人の立場が逆転することを理解しただろう。キリエに敢えて何も言わなかつたのが幸いした。

（最初の顔見せとしては上出来だ）

ジュビリーは慎重に胸中で呟いた。

## 第一章「ロンティニアム教会の修道女 第3話（前書き）

祖父との別れを告げると、キリエはジユビリーと共に王都イングレスへ向かつた。そこに待ち受けていたのは……。

## 第1章「ロンティーヴム教会の修道女」第3話

キリストたちはまず玉座の間へ通された。寒々しいほど広い空間。天井を支える、細かい細工が施された列柱。まるで天国のように夢のような世界が描かれた天井画。煌く豪華絢爛な空間に、キリストは息をひそめて圧倒されていたが、大理石の床に敷かれた金色の絨毯の先に鎮座する玉座を目にし、彼女はますます緊張した。

「グローリア女伯、どうぞ楽になさつて下さい」

白髪の廷臣がわざかに気の毒そうな表情で声をかける。

「私は宫廷侍従長セヴィル伯爵。先王陛下の御世から宫廷の管理を任されております」

キリストは強張った顔つきを崩さないまま、小さく頷く。セヴィル伯は目を細めて幼い女伯爵を見つめる。

「……お懐かしうござります。あんなに幼かつたレディ・キリストが、このように慎ましやかで立派な女性にお成りとは……。時が経つのは早うござりますな」

自分に記憶はないが、相手は自分を知っている。そんな人々が次々と現れ、戸惑いを隠しきれないキリストは怯えた表情でジュビリーに視線を向けるが、彼は黙つて頷くだけだった。

「先王陛下がご存命でしたら、女伯のご成長にお喜びになられたことでしょう」

感慨にふけるセヴィル伯の周りに、廷臣たちが肅々と手に何かを捧げてやってくる。巨大なテーブルに一冊の本が恭しく置かれる。

モーティマーが前へ出ると厳かに申し立てた。

「それでは、始めましょう」

キリストは無言で頷いた。

「一四七九年、レディ・ケイナ・アッサーがエドガー王との御子を懷妊……。出産後、一年間はプレセア宮殿で生活したと記録がございます」

そう言われても、記憶のないキリエは戸惑うばかりだ。

「そして、一四八一年にレディ・ケイナが死去。祖父であるグローリア伯爵が、エドガー王の反対を押し切つてロンディニウム教会へ預けたとされています」

「反対を……、押し切つて？」

意外な事実にキリエが思わず聞き返す。

「陛下はレディ・キリエを大変可愛がつておいででしたからモーティマーが控えめに口を挟む。そして、セヴィル伯が声高に呼びかける。

「レディ・キリエ・アッサー。あなたには王家の血縁を示す証拠がおありますか？」

皆の視線を一斉に受け、キリエは困惑の表情でジユビリーを振り返る。彼に目で指示を下され、キリエはおずおずと左手を差し上げると、中指にはめた指輪をそっと外した。

「失礼」

モーティマーが指輪を受け取ると、手を眇めて指輪を見つめる。

「……一四七九年。K・A・E・O・Aより」

廷臣たちの口から控えめながらざわめきが零れる。

「あなたがエドガー王の御子であることが確認されました」

廷臣たちが改めて深々と敬礼する。が、キリエは内心呆気にとられていた。こんな簡単な確認で済まされるものなのか？ だが、彼女の思いとは裏腹に、運命の歯車はゆっくりと確実に回りついていた。モーティマーがキリエを玉座に促す。怯えた目で再びジユビリーを振り返るキリエ。

「…………」

ジユビリーに田で促され、恐る恐る玉座に歩み寄る。重厚な檻の木で作られた玉座には深いワイン色のピロードが張られ、主を無言で待っていた。キリエがしばらく玉座を凝視していると、傍らにジユビリーが音もなくやってくる。そして、手を添えて座るよう促す。キリエは泣き出しそうな顔つきで椅子に歩み寄ると、ぎこちない動

作で腰掛けた。その様子を、キリエ同様、緊張した面持ちのジョンが見守る。

「……レディ・キリエ・アッサー」

セヴィル伯らが跪き、居心地悪げに座り込んだキリエを見上げる。

「……王位の宣言をいたしますか」

キリエはわずかに視線を上げた。玉座の間の天井には、見事なフレスコ画が描かれている。青空に雲が湧き上がり、神が戴冠式を挙げる王を祝福する様子が描かれている。描かれているのは、現在のアングル王家の始祖ウイリアムだ。五百年続くアングル王家の歴史に、自分のような庶子が記録されて良いものか。キリエは最後まで迷つた。だが、昨夜のジユビリーの言葉が蘇る。ベネディクトの顔も脳裏をよぎつた。キリエはしばらく目を閉じ、胸の中で神への祈りを唱えると、ゆっくりと目を開けた。

「……王位を、宣言します」

か細い声でキリエが囁き、その場にいた者たちは皆、深々と頭を下げた。

「早速、クロイツのモンティ大主教へ使いを送りましょう」「その前に」

キリエが遮る。

「国王陛下……、父の、墓前に……」

モーティマーは頷いた。

「畏まりました。ご遺体は聖アルビオン大聖堂の礼拝堂に安置しておられます。参りましよう」

立ち上がろうとするキリエに、ジユビリーがそっと手を差し伸べる。その手を取つて立ち上がる際、彼はキリエにそっと耳打ちした。

「上出来だ」

「……」

そんなジユビリーを、キリエは黙つて上目遣いで見つめる。

いつかは訪れるのが夢だつた聖アルビオン大聖堂。アングル王国におけるヴァイス・クロイツ教の総本山であり、国の宗教的中心地

だ。主要な王室行事はほとんどここで行われる。例えば君主の戴冠式や結婚式。様々な歴史の舞台になってきた場所だ。自分がそこへ、こんな形で訪れる事になるうとは。

これから先に一体何が待っているのか、不安ばかり膨れ上がる中、モーティマーの先導で玉座を離れた時。突然外からざわめきが上がり、キリエが思わず不安げにジユビリーに寄り添うと、大広間に衛兵がひとり飛び込んでくる。

「申し上げます！ ルール公の使者が謁見を求めて参りました！」

ルール公。その名を耳にした瞬間、その場に緊張が走る。

「ルール公が……、もう帰られたのか？」

「こんな時に……！」

セヴィル伯の切迫した様子の咳きに、キリエの顔から血の氣が引く。

「……伯爵……！」

ジユビリーは目を眇め、眉間に深い皺が刻まれる。

「義兄上……！」

ジョンが側へ小走りに駆け寄ると口走る。そんな中、モーティマーは顔色ひとつ変えずに、つかつかと衛兵に歩み寄った。

「追い返せ」

思つてもみない言葉にキリエが息を呑む。

「すでにグローリア女伯が王位を宣言された。不服があるならば使者ではなく、ご本人が入城するよう、言つて追い返せ」

「しかし……！」

再び外でどよめきが起こったかと思うと、侍従や衛兵の制止を振り切つてひとりの男が押し入る。

「サー・オリヴァー！」

モーティマーが怒気を込めて名を叫ぶ。

（オリヴァー・ヒューイット……）

ジユビリーは胸の中でその名を呟いた。ルール公レノックス・ハートの腹心だ。レノックスの数々の黒い噂の処理を任せていると言われる、陰険な男だ。

「その様子では」

ヒューイットは鷹揚な調子で声高に言い放った。艶のない黒い髪。いかつい体に、あばたの多い浅黒い顔。彼は奥まった田で並み居る廷臣らを眺め渡した。

「すでに王位宣言を済ませたのかな」

「その通りだ、ヒューイット。グローリア女伯はすでに王位を宣言された。出直して、そなたの主君にお伝えしろ。王位の宣言をされたいならば、御本人がプレセア宮殿に参内するようにと」

モーティマーに言われ、ヒューイットは胡散臭げにキリエの顔をじろりと睨みつける。突然のことにキリエは声も上げられず、ただ怯えた表情で見つめ返すことしかできない。

「あなたがレディ・キリエ・アッサーか」

「その通り」

ジュビリーが一步前へ出る。

「王位継承権者である。礼を以てせ」

「ふん」

ヒューイットは鼻で笑うとキリエに向くつと歩み寄る。

「ルール公にお仕えするオリヴァー・ヒューイットと申します」

跪き、型通りの敬礼はするものの、ヒューイットの狡猾そうな瞳にキリエは思わず顔を強張らせて後ずさる。

「兄君から伝言をお預かりいたしております」

「あ、兄の……？」

ヒューイットは目を細め、口元に笑みを浮かべると言い放った。

「そなたの王位は認めぬ

その場にいた者たちが一瞬凍りつくが、間髪入れずにモーティマーが怒鳴る。

「口を慎めッ！ ヒューイット！」

「私は主君の言葉をお伝えしているだけですよ、サー・ロバート」

ヒューイットは立ち上がりとキリエを見下ろした。

「あなたは一介の修道女に過ぎない。十一年もの間教会に閉じこも

り、世界を知らぬ幼女にこの国の未来を任せるわけには参らないのですよ。当然、エドガー王の血を引く成年男子であるルール公が君主に相応しい。あなたにルール公の王位を認めていただけるのであれば、公はあなたに公爵位を叙位すると仰せです

「勝手なことを申すなッ」

ジュビリーが鋭く言い放つ。

「勝手？ そちらこそルール公がお留守の間の勝手極まりない行為。ルール公はお怒りでござりますよ」

「先王陛下に嫡子がいらっしゃらない以上、レディ・キリエにも王位継承権がある。君主には性別や年齢、経験よりも必要なものがあるのではないか？」

「それではまるで、ルール公は君主の器ではない、と仰せのような言い草ですね、クレード伯」

ヒューイットはジュビリーに詰め寄り、傍らのキリエにちらりと視線を移す。

「レディ・キリエ。あなたのよつな修道女が王位継承で争いを起せば、クロイツのムンティ大主教はお怒りになられるでしょうね。修道女の本分を忘れ、欲に駆られて権力を望めば、大主教はあなたを破門にするやもしれませんぞ」

「！」

破門という言葉にキリエは思わず両手で口を覆う。

「黙れ、ヒューイット！ そなたの主君も今までどれだけ多くの問題を引き起こしてきたか、知らぬわけではあるまい！」

「ルール公が、いつどのような問題を？」

「白々しい……！」

ヒューイットとモーティマーの言い争いをジュビリーは不審げな目で見守っていた。

(オリヴァー・ヒューイット……。これほど饒舌な奴だったか？)

ジュビリーが知っているヒューイットはいつもレノックスの影に隠れ、不始末の始末をさせられる小心者といった姿だった。

「よく考えてみなされ。レディ・キリエはまだ十四歳にも満たない少女。ガリアやエスタド、コヴォーレンといった列強が我が国を狙つておりますぞ。不安に駆られた国民が反乱を起こしかねないではありますな……」

ペラペラと調子よくしゃべり続けるヒューイットが、ちらちらと視線を動かすのにジュビリーが気づく。

「それに比べ、ルール公は内戦や外国での戦争でも戦績を上げ、国を背負うに充分な素質をお持ちでござります。レディ・キリエがルール公の王位をお認めになり、協力していただけるのであれば、兄妹仲睦まじく暮らせることができるというもの……。レディ・キリエも、もう鳥籠同然の暮らしに戻りたくないでしょ？」「そこで、ヒューイットは再び視線を動かした。その目が広間の大時計を捉えていたことに気づいたジュビリーは、はっとした。

（まさか……！）

そして、モーティマーに向かつて叫ぶ。

「城門を閉めさせりツ！ モーティマー！」

「！」

だが、ヒューイットが手を上げて制すると怒鳴り返す。

「気づくのが遅いですぞ、クレド伯！ ルール公はすでに市街へ入つておりますよ！」

「！」

叫ぶや否やヒューイットが腰の長剣を抜き放ち、キリエが短い悲鳴を上げる。が、ヒューイットの背後から素早く抜剣したジョンが斬りかかり、ヒューイットは体を仰け反らす。

「義兄上！」

「伯爵ツ！」

金切り声を上げるキリエの手を引っ張ると、ジュビリーが駆け出す。が、外からも人々の怒号や斬り合つ音が聞こえてくる。ジュビリーは舌打ちすると剣の柄に手をかけながら壁に寄り添い、外の様子を窺つた。ヒューイットと共に入城した使節団だろうか。武装し

た騎士たちが宮殿の衛兵と斬り合いを繰り広げている。大廊下の奥からは女官たちの悲鳴が聞こえてくる。

「ジョン！」

ジユビリーから名を呼ばれると、ジョンはヒューリットと一緒に二度と刃を打ち合わせ、渾身の力で剣を振り下ろした。

「！」

鈍い音と共にヒューリットの長剣が叩き折られ、ガランと床に転がる。思わず剣の柄を凝視するヒューリットを蹴倒すと、ジョンは身を翻して義兄の元へ馳せ参じた。

「義兄上！」

「クレドへ帰るぞ！ 出直しだ……！」

さすがに悔しげな表情で口走ると、ジユビリーはキリエを脇に抱えるようにして抱き寄せて走り出した。

「は……、伯爵……！」

腕の中でキリエが消え入りそうな声を出す。

「歯を食いしばれ。舌を噛むなっ」

ジユビリーたちはキリエを中心の一気に大通路を突っ走った。ヒューリットの使節団も元々人数が多いわけではないらしい。入り乱れる侍従や衛兵たちをやり過ごし、宮殿を飛び出すると、ジョンがあとと声を上げる。城門から火の手が見える。よく見ると城門で宮殿の軍が交戦している。

「北門から出るぞ」

「はいッ！」

ジョンたちは待機させていたクレドとグローリアの軍を呼び集め、北門へ誘導する。ジユビリーが馬に跨るとキリエの体を引っ張り上げた。

「今からクレドまで走る。ルール軍を引き離すまで馬から降りんぞ。良いなッ」

「ま、待つて！ 待つて！ 伯爵！ わ、私……！」

キリエが半狂乱で叫ぶが、ジユビリーは指先でキリエの口を塞い

だ。そして顔を近づけて囁く。

「今はこの場を脱することが先決だ！」

そして馬の腹を蹴ると走らせる。

「義兄上！」

後方で軍をまとめるジョンが叫ぶ。振り返るとジョンが顔を歪め、後ろを指差している。目を凝らしてみると、炎と煙で軍勢が見え隠れする中、黄色の紋章旗が翻つているのが見える。黄色の旗に、心臓が描かれた盾が重ねられた絵柄。はためく紋章旗の影から、一人の騎乗の男が現れる。

「……レノックス・ハート……」

ジユビリーの咳きに、キリエがびくっと体を震わせる。甲冑姿の青年は大声で命令を下していたが、やがてこちらに気づくと素早く兜を脱いだ。

(気づかれた)

ジユビリーが舌打ちする。

キリエに似た栗毛に、冷たいアイスグレーの瞳。青年は獲物を見つけた獵犬のような残忍な笑みを浮かべ、馬の腹を蹴った。

ジョンが怒鳴り声を上げ、騎兵たちを巧みに誘導するとレノックスの部隊を即座に包围する。その場で騎兵による白兵戦が始まるが、一際目立つ長身のレノックスは幅広の長剣で騎士たちを次々と馬から叩き落してゆく。

「逃がさんぞッ！ キリエ・アッサー！」

レノックスの咆哮を耳にしたキリエは全身が粟立った。包围を突破すると、レノックスは怒涛の勢いでジユビリーに迫る。彼はキリエをぐいと馬の首へと押し倒し、耳元で怒鳴った。

「顔を上げるな！」

返事もできないでいるキリエの耳に、鞘から剣が走る音が飛び込む。

「ひツ……！」

刃物や風を切る音は大嫌いだった。

「おおッ！」

レノックスが叫び声を上げながら長剣を振りかざし、打ちかかる。ジュビリーは馬を巡らしながら剣を打ち流し、返す剣でレノックスの顔面をなぎ払う。頬と鼻から鮮血が飛び散り、キリエの衣装に降りかかる。相手は思わず<sup>バーントレット</sup>箸手を嵌めた手で顔を覆うが、怒りのこもつた目でジュビリーを凝視すると、再び剣を振りかぶる。正確にジユビリーの脳天を目がけて斬りかかるレノックスだったが、ジュビリーはそのことごとくを打ち返した。そして、頭上で鳴り響く剣戟の音に体を震わせているキリエに気づくと、レノックスはキリエに向けて剣を振りかぶった。その瞬間、ジュビリーは肩に羽織つていた外衣<sup>サー</sup>を引きちぎると投げつけた。

「ツ！」

その隙にジュビリーは手綱を引くとその場を脱した。外衣を叩き落とすがその外衣に馬が足を取られ、一瞬馬が棒立ちになる。

「くそッ！」

レノックスが苛立たしげに喚くと、すでにキリエとジュビリーを乗せた馬は黒煙と土煙にかき消されていった。

「あいつ……、ジュビリー・バートランド……！」

レノックスは歯噛みするとその名を呟く。顔から流れる血が唇を濡らした。

「公爵！」

後ろから慌てふためいたヒューイットの声が投げかけられる。

「お、お怪我は……！」

「この、間抜けがッ！」

レノックスは振り向きざまに腕をヒューイットに叩き込む。ヒューイットは呻き声を上げて馬から転げ落ちた。

「貴様がキリエ・アッサーを殺しておけば、こんなに手がかかることはなかつたのだッ！ 愚か者めがッ！」

「も、申し訳ございません……！」

レノックスは荒々しく呼吸を繰り返すとジュビリーたちが逃走し

た方角を睨み、頭を振る。

「腕のない貴様をやつたのがわが身の不幸よ。時間がなかつたとは言え……」

「……公爵……」

「なんだ」

「王太后を捕らえましたが……」

ヒューイットの言葉に、レノックスはうんざりしたように天を仰ぐ。

「あんな女など打つちやつておけ！ 殺せばコヴェーレンとの間に軋轢が生じる。生かしておいても何の役にも立たん。どうしようもない女だ！」

「い、いかが計らいましょ、う」

「ベイズビル宮殿にでも幽閉しておけ」

イングレス郊外の小さな宮殿の名を挙げ、レノックスはこの話を切り上げた。

「……それにも」

ようやく落ち着きを取り戻したレノックスが声の調子を落とす。

「あの娘が、本当にキリエ・アッサーか？」

「まだ十四歳に満たないはずです。未だに修道女としての意識が抜け切らないらしく、おどおどした様子でした」

「昨日の今日だ。当然だ」

レノックスは過去に何度かプレセア宮殿でキリエを見かけていた。その時彼はまだ八歳。キリエは一歳になつたばかりだった。父の愛妾、ケイナ・アッサーに抱かれていた姿が目に焼きついている。父エドガーはキリエに夢中になり、レディ・ケイナの住む離宮に入り浸り、王宮を留守にすることが多かつた。あの時の幼子が、自分を出し抜いて王位を宣言した。レノックスは目を眇め、奥歯を噛み締めた。

すでに、クレドの軍勢はあらかた逃亡し、傷ついた者や命を落とした者たちが地面に無残に転がっている。

「火を消せ。プレセア宮殿を支配下に置かねばならん。クロイツへ使者を送る準備もさせろ」

「はッ」

レノックスは顔の血を拭うと、手のひらを見つめる。精悍で男らしい顔つきは、性格を除けば美青年の内に入るだろつ。だが、血に汚れたその顔からは狂気が見え隠れする。

ロンティニウム教会の修道女など、すぐに葬り去つて王位宣言ができるものと考えていたレノックスにとつて、キリエを取り逃がしたことは予想外だつた。

「……これは、長引くかもしれんな」

レノックスの予測は、決して間違つてはいなかつた。

無言で馬の首にしがみついたままのキリエを乗せ、ジュビリーは駆け続けた。しばらく軍を走らせていると、供の者が声を上げる。

「伯爵！ あれを！」

前方に田を凝らすと、丘の頂から騎馬の音が響いてくる。皆に緊張が走るが、やがて軍勢が姿を現す。先頭の騎兵が持つ軍旗は 青蝶だ。

「レスター……」

一斉に安堵の声が上がる。

「伯爵！」

前方で馬を駆つていたレスターが声を張り上げる。

「レスター、よく来てくれたな」

「遅くなりました。ルール公が帰国したとの報せを受け、すぐにグローリアを発つたのですが」

ジュビリーはちらりと後方を見やつた。

「ルール軍もすでに追つてきてない。我々を追つよつもプレセア宮殿を手中に入れることを優先したのだらつ」「キリエ様は？」

レスターの言葉に、ジュビリーは震えているキリエの肩に手をか

けた。

「大丈夫か、キリエ」

そう言つて体を起こそうとするが、キリエは短く「放して！」と叫ぶ。レスターが一瞬顔をしかめるが、ジュビリーは表情を変えない。

「……馬から降ろして……！」

「降りてどうする」

「教会に帰るのよッ。もう……、こんなのに耐えられない……！」

両手で肩を抱き、身を震わせて叫ぶキリエを、ジュビリーは疲れきった表情ながらもじっと見つめる。

「あの人気が王になりたいならなさせてあげればいいわ……。私には、関係ない……。私が女王になんかなれるわけがない……！今までどおり、修道女でいちゃいけないの？ どうして、私がこんな目に遭わなければならぬの……！」

言葉の最後は涙声になつてかき消された。レスターは氣の毒そうな表情でキリエをただ見つめることしかできなかつた。ここまで言われれば、何も言い返す言葉はない。心を閉ざし、一切を拒否するキリエにどう声をかけるのか、レスターは黙つてジュビリーに目を移す。

「……キリエ」

彼は低く呟くと体を屈め、耳元でもう一度呟く。

「よく聞け、キリエ」

「いや……！」

「聞け」

ジュビリーは無理やりキリエの頬を両手で包むと顔を上げさせた。

「やめて、放して……！」

「いいから聞け」

涙と血で汚れたキリエの顔が苦痛に歪む。

「いいか、一度は言わんぞ」

そう前置きすると、ジュビリーは鼻が触れ合つまどに顔を近づけ

た。

「王には嫡子がいたが死んだ。……私が殺したのだ。おまえを女王にするために」

耳鳴りが鳴り響く頭に、その言葉はまるで何の意味も成さない言葉のように漂つた。だが、次第にはつきりしてくる頭が徐々にその言葉を理解し始め、キリエの顔から血の気が引いてゆく。

「……今、なんて……」

「一度も言わせるな」

キリエの背に寒気が走る。唇をかすかに震わせ、目の前にいる男を凝視する。すぐ側に控えているレスターが険しい顔で俯く。彼はこの事実を知つていいようだ。

「……私の、ために……？」

「そうだ。運命の車輪はすでに回り始めている。とつぐの昔にな」

「……どうして……」

ぼんやりと呟くキリエに、ジュビリーはわずかに顔を歪める。

「おまえにどつては、確かに迷惑な話だろう。だが、もう始まったことなのだ。すべてはアングルのためだ」

そう呟つと、ジュビリーは両手の力をゆるめた。しばらく二人が見つめ合つていると、じんがり殿を務めていたジョンがやつてくる。

「……義兄上……？」

一人のただならぬ様子に息を呑むが、それ以上は口を挟まない。

「……ジョン。引き続き追つ手に警戒しろ」

「はッ」

プレセア宮殿とその周辺は、ようやく戦闘の後片づけを始めていた。傷ついた者たちは兵舎や教会へ運ばれ、怪我の浅い者は死者の埋葬を始めた。そして、内戦の勃発に、皆不安で一杯の表情で宮殿を見守っていた。

すでに王太后ベルをベイズヒル宮殿へ追い払ったレノックスは、治療を終えるとロバート・モーティマーを呼びつけた。その口調か

ら、キリエの擁立に傾いていたと思われるモーティマーをどう処分するつもりなのか、ヒューイットは高みの見物を決め込んだ。

「キリエ・アッサーを女王に擁立するつもりだつたのか？」

レノックスは玉座に足を組んで座り込み、頬杖をついてモーティマーを見下ろした。顔面に巻かれた包帯が手負いの獣のような印象を与えるが、その瞳には獰猛な光をたたえている。

「……私はエドガー王の秘書官です」

目を伏せ、不機嫌そうに答えるモーティマー。若いのになかなか度胸の据わった奴だ、とヒューイットは内心嘲笑つた。

「どなたが君主になるうど、それは私の関知しないこと。ですが、秘書官として君主に相応しい王位継承者を正しい手続きで迎えたい。それだけのことです」

「なるほどなるほど。相変わらず生真面目な奴よ」

レノックスはつまらなげに目を閉じ、眉をひそめる。

「……父上もおまえのその堅物ぶりを気に入っていた」

モーティマーは黙つて冷血公を見上げた。若い頃から王に可愛がられていた自分をレノックスが目の敵にしていたことぐらい、彼は知っていた。

「私はな、合理主義者だ」

突然、およそ似合わぬ言葉を言い出したレノックスにモーティマーは口をわずかに歪めた。

「使えるものは使い、使えないものは捨てる。あの女、捨てたいのは山々なんだが……」

王太后ベルのことだ。

「捨てるにしても捨て方に悩むところだ。とりあえずベイズビル宮殿に幽閉することにした。そこで、おまえには監視係を命じる」

「……私がですか？」

思わず迷惑そうな顔つきをしたモーティマーに、レノックスは満足げな笑みを浮かべる。

「つまり毎日になりそつだな？」

レノックスの真意を量りかね、モーティマーは黙つて射るようにな  
凝視する。

「私は合理主義者だと言つたはずだ。おまえは秘書官としてこの宮殿の機能に熟知している。消すには惜しい」

それだけのことか……。秘書官という立場でなければ簡単に殺されていたかもしれない。自分がいつでも消される可能性がある存在だと思い知らされたものの、どこか他人事のような気がしてならなかつた。

エドガー王に仕えて十年余り。モーティマーは彼なりに誠心誠意仕えてきたつもりだつた。愛妾たちとの愛欲の生活に溺れ、妻への誠意は微塵も感じられず、庶子を溺愛する王。特にレノックスが次々としでかす醜聞に甘い処分を下し続け、国民や議会からの不満を逸らすのに多くの時間と労力を費やされた。しかし、その罪滅ぼしのつもりか、一方では救貧法を發布して貧しい者を保護し、教会や修道院に多額の寄付も行つた。それ故に、農民や下層の市民らは王のふしだらさにも寛大だつたのだ。

特にモーティマーは幼い頃から側に仕えていたために可愛がられた。そして、身勝手で傍若無人でありながら、王としての技量も兼ね備えていたことを知つていた彼は、王に対しても悪い印象はなかつた。そんな主君を失い、正直誰が王位に就こうがどうでもよかつた。王は、死んだのだ。

「監視係では不満か？」

「いえ、別に」

虚ろな表情でモーティマーは頭を下げた。

「……仰せの通りにいたします」

レノックスがプレセア宮殿を手中に入れたその頃。王都イングレス郊外のサー・セン聖堂では修道士たちが慌しく行き交い、礼拝にやつてきた信徒たちは皆不安げに彼らの様子を見守つていた。聖堂に隣接する僧坊の一室。ひとりの青年が椅子に腰掛け、数人

の修道士が忙しげに旅支度をしているのを黙つて見守つている。否、その日は堅く閉ざされている。気品がある整つた顔立ちをしているが、閉ざされた西田には青黒いクマが広がっていた。やがて、部屋の扉を叩かれる。

「司教……！」

どこか切羽詰つた呼びかけに、眉をひそめながら修道士が扉を開ける。

「司教……！ イングレスに行つてはなりません！ ルール公がイングレスを支配下に置きました！」

瞬間、人々が絶句する中、司教と呼ばれた青年が目を閉じたまま顔をもたげる。

「……レノックスが？」

「その直前にグローリア女伯が王位宣言をしたのですが、ルール公の軍と衝突し、女伯は敗走したようです」

青年の顔がぴくりと引きつる。

「グローリア、女伯……？」

「……レティ・キリエ・アッサーです」

修道士の言葉に、青年は辛そうに眉間に皺を寄せた。

「……キリエ……」

それから数時間後。キリエたちは疲れきつた体を引きずるようにしてクレド城に帰還した。日が長くなつたとはいえ、すでに夕刻に差し掛かっている。

初めて見るクレド城はグローリア城よりももつと大きく、威圧感のある城壁がそびえ立ち、オレンジ色に焼けた太陽を背に、その姿を黒く浮き上がらせていた。クレド城を見上げたキリエは、やがて憂鬱そうに黙りこくつて目を伏せ、ジョンの呼びかけにも応じなかつた。

今回のイングレス入りに率いられた軍勢は、クレドが擁する兵の三分の一にも満たなかつたらしい。多くの兵たちが出迎え、そして周

辺の国境の周りを固めるため、守備隊が出動していく。

「殿、お帰りなさいませ」

クレド城代家令ハーバート・ビゴート男爵が緊張した面持ちで出

迎えた。

「お怪我は……」

「ない。警戒を怠るな」

「はつ」

「兄上！ キリエ様！」

振り返ると、城門のアーチからマリー・ヘレンが駆け寄つてくる。

「皆様、ご無事ですか」

「キリエを頼む」

「キリエ様、お怪我は？」

マリーが腰を屈め、キリエの髪を優しく撫でる。が、固い表情のキリエはかすかに顔を横に振るだけだった。

「お可愛そうに……。お疲れでしょう。さ、体を清めましょう」

そう言って優しく手を取るとその場から連れ出す。

「ジョン、グローリアとトウリーにも使いをやれ

さすがに疲れた声でジュビリーが命令を下す。

「レスター、イングレスへの監視は……」

「斥候を放つております」

「よし」

男たちは重い足取りで城内へ入ると疲れた体に鞭打ち、城主の間に集まる。簡単な食事をワインと共に済ませると、三人はアングルの地図を広げ、これから対策を練り始めた。

「ルール公がすでにイングレスに入っていたとは……」

「父王の死を聞いたらすぐさま戻つてくるだろつと予想はしていたが、……油断した。考えてみればすでに三日経つているのだ」

「プレセア宮殿はルール公の手に落ちた……。しばらくは、実質的なイングレスの支配者となりますね」

ジュビリーは大きく息を吐くと額を押された。事がつまく運ぶと

は思つてもいなかつたが、イングレスでレノックスと戦闘に及ぶとは予想していなかつた。キリエの精神的な動搖も心配だつた。

「宮殿内の様子はいかがでございましたか。 キリエ様を拒む者たちはおりましたか」

「廷臣たちは歓迎していたよ」

レスターの問いにジョンが答える。

「皆、あの冷血公に比べれば修道女の方が良いに決まつてゐる、といつた態度だつた。ただ、王太后は不満そうだつたな」

「そういえば、王太后は今……？」

「さあな。どうなつたか知つたことではない」

思わず本音を漏らすジュビリーだったが、レスターは眉をひそめる。

「しかし、ベル王太后はコヴェーレンのオーギュスト王の姫君。手にかけたとあつては、黙つてはおりますまい」

「レノックスも王太后を殺すほど馬鹿ではあるまい」

「そう願いたいのですが……」

レスターの考え深げな表情に、ジョンまで不安そうな顔つきになる。キリエを盛り立てる一派の中にあつて、最も老練な策士であるレスターを、ジュビリーも頼りにしている。重苦しい空気が流れる中、扉を控えめに叩く音がする。

「……兄上」

「入れ」

扉が静かに開かれ、思い詰めた表情のマリーが顔を覗かせる。

「キリエの様子はどうだ

「それが……」

「どうした

「お体を清めて、食事を用意したのですが、一口もお召し上がりにならないのです」

ジョンが思わずジュビリーを振り返る。

「戦場で怖い思いをされたのでしょうか。それにしても、一言も口を

きいでは下せらないし……」

ジユビリーは椅子にもたれかかり、足を投げ出して天井を仰ぎ見  
た。およそジユビリーらしくない投げやりな姿だ。

「……義兄上……」

ジョンに促され、ジユビリーは重い口を開いた。

「……キリエに……、王太子を殺したことを告げた

「い、いつ……！」

ジョンとマリーが顔を青ざめさせる。

「軍を退却させる時に……、教会へ帰ると言ひ出して聞かないもの  
だから……」

「しかし……」

「キリエ様はまだ、兄上に対しても不信感をお持ちです。そんな状態  
で王太子の件を持ち出すなど……」

「それなら」

首をもたげ、妹に視線を向ける。

「信頼関係を結んだ後になつて真実を聞かされたらどうする。あの  
娘の性格だと、その方が打ちのめされる」「  
それは、そうですが……」

「いざれにしろ、今の状況とキリエ自身の立場をわからせるために  
は、遅かれ早かれ告げねばならなかつた。……確かに、あの場で告  
げたのが正しかつたかどうかは、わからんがな」

ジユビリーの言葉に三人は押し黙つた。しばらくするとジユビリ  
ーは重い溜め息を吐き出すと、体を起した。

「近い内にレノックスはクロイツに使者を送るだろう。大主教がど  
んな判断を下すか……。これまでにも、行いの悪いレノックスに対  
して何度も破門をちらつかせてきた大主教だ。まさか戴冠要求を受  
け入れるとは思わんが」

「クロイツを味方に引き入れなければなりませんね」

「大主教の周辺に人をやります」

「頼む」

男たちの会話を、マリーはひとり不安げな表情で見守っていた。

「何か必要なものがあれば、いつでも仰って下下さいませ、レディ・キリエ。外に歩哨を立たせておきます故」

華美な衣装から多少落ち着いたワンピースに着替えたキリエは、強張った表情で頷いた。城主と違つて人が良さそうな顔つきをした家令は、誰も寄せ付けない固い表情を崩さないキリエを氣の毒そうに見つめてから部屋を退出した。扉が閉るとキリエはゆっくりと窓辺に歩み寄り、外を眺めた。夕暮れの陽射しがクレド城の城壁を照らし、城壁の周りには静かな町が広がっている。その向こうには見慣れた田園風景が広がる。

外に歩哨を立たされていては、自由に部屋を出ることもできない。キリエは自分の立場を思つて戦慄した。戦闘の恐怖もまだ癒えていない。そして、先ほど聞かされたジュビリーの告白。キリエは、まるで悪夢を見ているようだつた。

王太子エドワードは、五年前に狩りの最中に落馬が原因で夭折したとされていた。まだ十歳だった。それが落馬ではなく、ジュビリーによる暗殺が真実だったとは。エドワードは自分の異母兄だ。実權を握るつもりで王太子に手をかけ、自分を女王に擁立したとしたら……。

( 言つことを聞かない私に業を煮やせば、私も殺すかもしれない )

キリエは胸騒ぎを覚えながら呟いた。

( 権力のために人を殺すのであれば、レノックス・ハートと一緒にわ。私は、どうすればいいの…… )

考えていた答えは出ず、キリエはよろよろと窓から離れると部屋を見渡した。壁に、美しい細工が施された地図が飾られている。見るとこのクレド及びグローリア周辺の地図だ。キリエはじつとその地図を見つめ、やがて再び窓を眺める。日が先ほどよりも落ちている。胸騒ぎが一段と強まる。キリエの脳裏に、オリヴァー・ヒューイットの言葉が響く。

「あなたも、鳥籠同然の暮らしには戻りたくないでしょ」

（鳥籠……）

キリエは呆然と呟く。

「そうだ……。鳥籠に戻れば良い……」

キリエは窓際に駆け寄った。口が落ちる方角を確かめ、地図を仰ぎ見る。外の世界を歩いたことはほとんどないが、今はそんなことを言つている場合ではない。まずは、ここから逃げなくては。キリエは忙しく呼吸を繰り返し、必死に考えを巡らした。窓から身を乗り出すと、城壁の遙か下の方で農夫たちが荷車を数台率いて城の召使と話をしているのが見える。あれだ。キリエは扉に駆け寄ると拳で力いっぱい叩いた。扉のすぐ外で歩哨に立っていた兵士はびっくりして飛び上ると、慌てて扉を開く。

「いかがいたしましたかッ」

「や、薬草よ！」

キリエが上ずつた声で叫び、歩哨は眉をひそめる。

「早く薬草と水を持つてきて！ でないと、私……、し、死んでしまうわ！」

死ぬと言われて歩哨は慌てた。

「な、何があつたのですかッ」

「いいから早くッ！ 毒消しの薬草を持って来てッ！」

キリエに煽られ、歩哨は慌てふためいてその場を走り去った。その後姿を見送ると、キリエは部屋を飛び出した。

クレード城はグローリア城よりも大きい。キリエは息を潜めて石の廊下を走った。時折、侍女や従者の姿を見かけると、飾られた調度品に隠れるなどしてやり過ごす。最上階から三階ぐらいまで降りたものの、キリエは道に迷つてしまつた。不安げにおろおろと周りを見渡していると、どこからか人々の話し声が近付いてくる。慌てたキリエは、手近にあつた小部屋の扉を押すと中へ飛び込んだ。すると、

「あやっ

そこは急な斜面になつており、キリエは闇の中に転がり落ちていった。

「痛ッ……！」

壁に体を強打してよじやく上ると、キリエは顔を押さえながら立ち上がる。闇の中で壁を探ると取手らしきものがあり、そつと押し開く。さつと光が流れ込み、同時に土や草の香りが鼻をつく。恐る恐る顔を出すと、すぐそこは屋外だった。辺りに警戒しながら出ると背後を振り返る。どうやら緊急用の脱出口だつたらしい。キリエは体を低くしながら城壁伝いに駆け出した。そこへ、賑やかな話し声が聞こえてくる。城壁に身を隠しながらさつと様子を窺うと、農夫たちが談笑しながら藁束を庭に放り投げていく姿が見えた。キリエは農夫たちが作業を終えようとしているのを見計らうと、荷馬車に飛び込んだ。中には農具を入れる大きな麻袋が何枚もあり、その中のひとつに潜り込む。

やがて農夫たちは作業を終えると荷馬車につないだ馬に鞭をくれ、城門に向かつた。キリエは、息を殺して荷馬車が揺れるのに身を任せた。

国境周辺の警備に抜かりがないか、ジュビリーがレスターと話しながら廊下を歩いていると、マリー＝レンの声が響き渡つた。

「兄上！ 兄上！」

顔をしかめて振り返ると、妹と兵士が血相を変えて駆け寄つてくれる。

「どうした」

「き、キリエ様がッ……！」

マリーが息を切らして叫ぶ。

「キリエがどうしたッ」

ジュビリーの詰問に兵士が答える。

「さ、先ほど、女伯がただならぬご様子で薬草を持ってくるよう仰せられて……、そ、それで慌てて医師の元へ行き、戻つてくると

……、女伯のお姿が……！」

ジユビリーの無表情だった顔に険しい皺が刻まれる。

「「Jの……、馬鹿者がッ！」

思わず握り拳で兵士の顔を殴りつける。呻き声を押し殺してその場にひれ伏す兵士。レスターが真っ青な顔でジユビリーを振り返る。

「い、一体どこへ……！」

「探し！ 城内をくまなく探し！ 城の外もだ！」

その場にいた兵士や召使いたちが慌てて四方へ散る。

「城の外へ出られるでしょうか。まだこの城の内部を熟知していいキリエ様が……」

「手負いの狐は何をしでかすかわからん。最悪な事態は避けねばならん……！」

「はッ！ グローリアにも知らせろ！ 一刻も早くキリエ様を連れ戻すのだ！」

レスターの怒鳴り声が響き渡る。ジユビリーは大きく呼吸を繰り返し、唇を噛み締めた。

「キリエ……、早まるな……。おまえにはまだ、話さなければならないことがたくさんあるのだ……！」

荷馬車の荷台から、そつと顔を出して外の様子を窺うキリエ。すでに日は落ちかけ、辺りは暗くなり始めていた。やがて、通り過ぎてゆく道の傍らに里程碑マイルストーンが見えてくる。キリエは思い切って荷台から飛び降りた。帰路を急ぐ農夫たちは、荷台からキリエが飛び降りたことにも気づかなかつた。道端に転がり落ちたキリエは、痛みに顔を歪めながら体を起こした。マイルストーンまで歩み寄ると、沈む夕日の最後の光で刻んである文字を読み取る。

西、クレド。東、グローリア。

ロンディニウム村はクレド伯領との境に近いグローリア伯領だ。

キリエは「ぐりと睡を飲み込むと、意を決して夕日を背に歩き始めた。

やがて日は落ちた。キリエは飲まず食わずの状態でひたすら歩き続けた。幸いなことにこの日は満月だった。月明かりは思った以上に足元を照らしてくれる。轍がひどい道をとぼとぼと歩く。左右には寂しげな細い白樺が月光を受けて青白く浮かび上がっている。キリエは俯き、できるだけジユビリーのことは思い返さず、教会で過ごした日々を思い出した。

静かで落ち着いた教会だつたが、キリエが成長する「」と明るさが増していくようだつた。教会の人々は皆キリエを可愛がってくれた。今思い起こせば、ロンディニウム教会にはキリエと同じ年頃の子どもはいなかつた。そのため、彼女は皆の子どものように大事に育てられた。

幼い頃、大怪我をした時にロレインが処方してくれた薬草で傷が癒えた経験があつた。それから薬草に興味を持ち始め、自分の薬草園を作つた。手をかけければかけるほど質の良い薬草が採れ、キリエは夢中になつた。

いつも暗い表情で沈黙しているボルダー司教よりも、キリエは厳しくも優しいロレイン修道女が大好きだつた。ロレインはキリエに読み書きや計算だけでなく、アングルはもちろん諸外国の歴史まで教えた。そして、ヴァイス・クロイツ教にとつての公用語であるコヴェーレン語に留まらず、エスタド語やガリア語まで伝授した。キリエは、孤児でありながら四ヶ国語に精通した少女に成長した。

「今思えば」とキリエは胸の中で呟く。あれが彼女なりの英才教育だつたのだ。だが、教会を出たあの日、キリエを抱きしめて「この日が来なければ」と呟いたロレイン。彼女にとつてもキリエは娘のような存在だつたに違いない。キリエは、胸が締め付けられる思いだつた。

もうすぐロンディニウム教会へ、ロレインの元へ帰れる。息が切れながらも気力を振り絞つて歩みを進めていたキリエの耳に、不意に馬の嘶きが飛び込む。

ぎょっとして立ち止まり、周囲を見渡すと、遠くから複数の馬の  
だく足の音が響いてくる。狼狽たえたキリエはしばらく立ち尽くし  
ていたが、やがて慌てて白樺の根元に身を隠した。

それから数分後、十数メートル前方を数頭の騎馬が駆け抜けていった。武装した兵士なのか、それとも民間人なのかは暗くてよくわからぬ。キリエは息を殺してその様子を見守った。

馬の集団が通り過ぎた後、かなり時間が経つてからキリエは体を起した。膝がぐくぐくと震えており、思うように歩けない。キリエは道の中央に這うように戻ると、顔に涙が流れていることに気づいてその場へたり込んだ。汚れた手で顔の涙を拭う。すると、月明かりで指輪がぎらりと光る。思わず左手を見つめると、月光を受けた赤い蝶が毒々しい血のよつな光を放っていた。

「……！」

唐突に、背筋が寒くなつたキリエはとつさに指輪を外そうとしたが、何故か指輪は指の途中で止まつた。キリエは震える指で蝶をそつと撫でる。

「……どうして……」

キリエはかすれた声で呟いた。

「どうして、私が、こんな目に……？」

涙がぽろぽろと零れ落ちる。顔を歪め、体を丸めてキリエは突然自分の身に起きたことを思い返した。

遠縁と名乗る黒衣の伯爵。祖父との出会いと別れ。絢爛豪華な王宮で行われた王位宣言と、その後の乱闘。キリエには、何が起きているのか、皆が何を望み、自分をどこへ連れていくとしているのか、皆目わからなかつた。もう嫌だ。もう、あんな所には戻らない！  
キリエは顔を拭うと、ゆっくりと立ち上がつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3391z/>

---

女王キリエ

2011年12月16日18時57分発行